地尻遺跡・地尻II遺跡

―都市計画街路下の尻・茶屋町線取付道路
建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

1991

群馬県安中市教育委員会
群馬県安中市建設部

地尻遺跡・地尻II遺跡

— 都市計画街路下の尻・茶屋町線取付道路
建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

安 中 城 全 景

序

安中市は群馬県西毛地域のほぼ中心に位置します。市の中央には、西から東へ碓氷川が流れ、川に沿って緑豊かな田園風景が広がっています。また古くは東山道が通り、江戸時代には中山道、そして現在は国道18号線と交通の要として栄えてまいりました。

このたび、安中城の西側から大名小路につながる都市計画街路を建設することとなりました。しかし安中城跡は、市にとって非常に重要な遺跡であり、この中を街路が通ると言うことで、街路計画の変更をも含め関係各課と再三にわたり協議を行いましたが、計画どおり建設と言うことになり、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることとなりました。

今回の発掘によって、今まで確認されていなかった堀や水路があることがわかり、安中城の構造に新たな１ページを加えることができました。

こうした、埋蔵文化財はかけがえのない郷土の遺産であります。市民の皆様にも郷土の歴史を学習していただけるよう、社会教育、学校教育の場で広く活用を図り、文化財愛護の精神を広く普及するよう努めてゆく所存であります。

終わりに、発掘調査に御協力していただいた地元の皆様には厚く御礼申し上げたいと思います。

平成３年３月

安中市教育委員会

教育長　佐　藤　三木岩

例　　言

1　本書は安中市（建設部都市施設課）が行う街路下の尻茶屋町線建設事業に伴う地尻遺跡（略称D－1）、地尻II遺跡（略称D－3）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は地尻遺跡が昭和62年11月9日より昭和63年1月20日までの間、地尻II遺跡が平成2年1月9日より3月10日までの間実施し、遺物整理は地尻遺跡が発掘調査終了後昭和63年3月31日までと、平成2年4月1日から平成3年1月20日までの間、地尻II遺跡が発掘調査終了後平成2年3月31日までと、平成2年4月1日から平成3年1月10日までの間、断続的に実施した。

3　調査主体は安中市教育委員会であり、調査は社会教育課社会教育係大工原豊、千田茂雄が担当した。

4　本書の編集執筆は千田茂雄が行った。

5　遺構の写真撮影は、大工原と千田が行った。

6　遺物の写真撮影は千田、斉藤説成が行った。

7　遺物の実測及び遺構・遺物のトレース、遺物の拓本は千田、氏家芳子、小川正子、斉藤説成、佐藤厚子、古立真理子、黛幸生、横山春江、和田宏子が行った。

8　本調査における記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

9　発掘調査組織

安中市建設部		安中市教育委員会事務局	
建設部長	上原正司	社会教育部長	上原満雄
都市施設課長	反町良一	社会教育課長	茂木勝文（平成2年4月転出）
事業係長	小嶋六郎		中島茂也
技　師	萩原　弘	文化財係係長	森泉寿義雄
		主　査	松本　豊
		主　事	大工原豊（担当）
		主　事	千田茂雄（担当）
		主　事	小黒和明

10　調査に当たり地元の方々に様々な面で御協力いただきました。厚くお礼申し上げます。

11　調査より報告書作成に至るまで、次の方に御指導、御助言いただいた。深く感謝いたします。

（敬称略）

（故）山崎　一　　神戸聖語

12　発掘調査及び遺物整理従事者は次の通りである。(敬称略)

新井幸介　新井真弓　井上慎也（立正大学学生）　井上民衛　岩坂尚子　氏家芳子　岡田早百合　小川正子　片桐圭子　金井京子　金井武司　斉藤説成　佐藤厚子　下マスエ　神宮幸四郎　鈴木八郎　高木とき　多胡静　田島元治　田中重一　田中利策　田村悦子　中川京子　飛田紀子　古立真理子　黛幸生　村井田俊木　松原鬼長　松本恭子　松本文作　横山春江　吉沢秀子　和田宏子

凡　　例

1　遺跡全体図の縮尺は、地尻遺跡＝１／200　地尻II遺跡＝１／80

2　遺構の縮尺は、住居址、土壙、堀土層断面１／80　水路、墓址、溝１／40

3　遺物の縮尺は、１／４　石臼、板碑等の石製品および瓦は、１／８

4　土層説明中での記号、略称は次の通りである。

色調＜：より明るい方向を示す。(例１＜２：１より２の方が明るい)

しまり、粘性　◎：あり、○：ややあり、△：あまりない、×：なし

混入物　◎：大量、○：多量、△：少量、＊：若干、×：なし

A_s－A：浅間A軽石　A_s－B：浅間B軽石　A_s－YP：板鼻黄色軽石層

RB：ロームブロック　RP：ローム粒子　WP：白色粒子　焼土：焼土

炭：炭化物

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
挿図目次
図版目次
Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　調査の方法と経過 …… 1
Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 6
Ⅳ　層　　序 …… 7
Ⅴ　遺跡各説 …… 8
1　地尻遺跡 …… 8
(1)　遺跡の概要 …… 8
(2)　縄文時代の遺構と遺物 …… 8
(3)　平安時代の遺構と遺物 …… 10
(4)　中世の遺構と遺物 …… ~~16~~ 14
(5)　近世の遺構と遺物 …… ~~16~~ 14
(6)　時期不明の遺構 …… 22
(7)　堀出土の遺物 …… 22
2　地尻Ⅱ遺跡 …… 28
(1)　A区の遺構 …… 28
(2)　B区の遺構 …… 28
Ⅵ　ま と め …… 30

挿図目次

第１図　地尻遺跡・地尻Ⅱ遺跡位置図
第２図　遺跡位置図
第３図　遺跡位置図
第４図　調査区設定図
第５図　基本層序柱状図
第６図　地尻遺跡全体図（付図）
第７図　地尻遺跡時代別全体図（付図）
第８図　縄文時代土壙実測図
第９図　堀出土の縄文時代土器
第10図　Ｈ－１号住居址実測図
第11図　Ｈ－１号住居址出土の遺物
第12図　Ｈ－１号住居址出土の遺物
第13図　Ｈ－２号住居址実測図
第14図　Ｈ－２号住居址出土の遺物
第15図　掘立柱建物址実測図
第16図　堀土層断面図
第17図　堀柱穴集中部実測図
第18図　水路土層断面図
第19図　墓址実測図
第20図　墓出土の遺物
第21図　１号溝実測図
第22図　堀出土の遺物
第23図　堀出土の遺物
第24図　地尻Ⅱ遺跡全体図
第25図　窪庭館推定図

図版目次

図版１　調査区遠景、調査区遠景安中大橋より
図版２　地尻遺跡全景、地尻遺跡全景
図版３　Ｈ－１号住居址、Ｈ－１号住カマド Ｈ－１号住遺物出土状況、Ｈ－１号住覆土、Ｈ－１号住覆土、Ｈ－１号住覆土、Ｈ－１号住カマド覆土、Ｈ－１号住カマド覆土
図版４　Ｈ－１号住カマド覆土、Ｈ－２号住居址、Ｈ－２号住遺物出土状況、Ｈ－１、Ｈ－２号住居址、掘立柱建物址、堀柱穴検出状況、堀覆土、堀覆土
図版５　堀覆土、堀覆土、水路、水路、水路、水路遺物出土状況、水路覆土、水路覆土
図版６　１号墓、２号墓、３号墓、４、５号墓、４、５号墓、４号墓、４号墓、４号墓
図版７　５号墓、５号墓、６号墓、７号墓、８号墓、時期不明の溝、溝覆土、溝覆土
図版８　縄文土器、Ｈ－１住土師器坏、Ｈ－１住土師器坏、Ｈ－１住須恵器坏、Ｈ－１住須恵器坏、Ｈ－１住須恵器蓋、Ｈ－１住須恵器蓋、Ｈ－１住須恵器蓋、Ｈ－１住須恵器蓋、Ｈ－１住土師器長胴甕、Ｈ－１住土師器甕、Ｈ－１住土師器甕、Ｈ－２住土師器坏、Ｈ－２住土師器坏、Ｈ－２住土師器

坏

図版９　Ｈ－２住土師器坏、Ｈ－２住須恵器坏、Ｈ－２住土師器坏、Ｈ－２住土師器甕、３号墓陶器小碗、３号墓陶器小碗、５号墓陶器小碗、５号墓陶器小碗、６号墓陶器小碗、６号墓陶器小碗、６号墓古銭

図版10　土師器坏、土師器坏、須恵器坏、須恵器坏、須恵器坏、須恵器坏、須恵器坏、須恵器蓋、須恵器円面硯、須恵器高台坏、須恵器高台坏、須恵器高台坏、須恵器高台坏、須恵器高台坏、須恵器壺

図版11　須恵器壺、須恵器壺、軟質陶器内耳盤、軟質陶器内耳盤、軟質陶器内耳盤、軟質陶器内耳鍋、土師質小皿、土師質小皿、土師質小皿、土師質小皿、土師質小皿、土師質小皿、土師質小皿、土師質小皿

図版12　土師質小皿、五輪塔、宝篋印塔、宝篋印塔、板碑、板碑、石臼、瓦

I　調査に至る経過

昭和62年２月、安中市建設部都市施設課より安中市教育委員会へ都市計画街路下の尻・茶屋町線道路建設事業に係わる照会があった。この道路は市街の活性化を図るために数年に分けて建設工事を進めて行こうとするものであった。しかし道路が安中城の西側から大名小路へつながり、安中城の中を通るため、道路建設の計画変更をも含め、都市施設課と市教育委員会の間で再三にわたり協議を行った。しかし道路建設を実行することになり、事業実施に先立ち、発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになった。地尻遺跡は昭和62年度、地尻II遺跡は平成元年度の事業実施ヶ所である。

II　調査の方法と経過

地尻遺跡、地尻II遺跡とも道路の中心線を基準線とし、地尻遺跡は測量杭№14をＣ－８、№15をＣ－３グリッドとなるよう、地尻II遺跡は測量杭№15＋14をＢ－６グリッドとなるようグリッドを設定した。１グリッドは４ｍ×４ｍで北西隅を基点とし、北から南へＡ、Ｂ、Ｃ……、西から東へ１、２、３……と呼称するようにした。また、グリッドをさらに４分した２ｍ×２ｍの小グリッドを設定し、北西、北東、南西、南東の順にアルファベットの小文字でａ、ｂ、ｃ、ｄと呼称することにした。

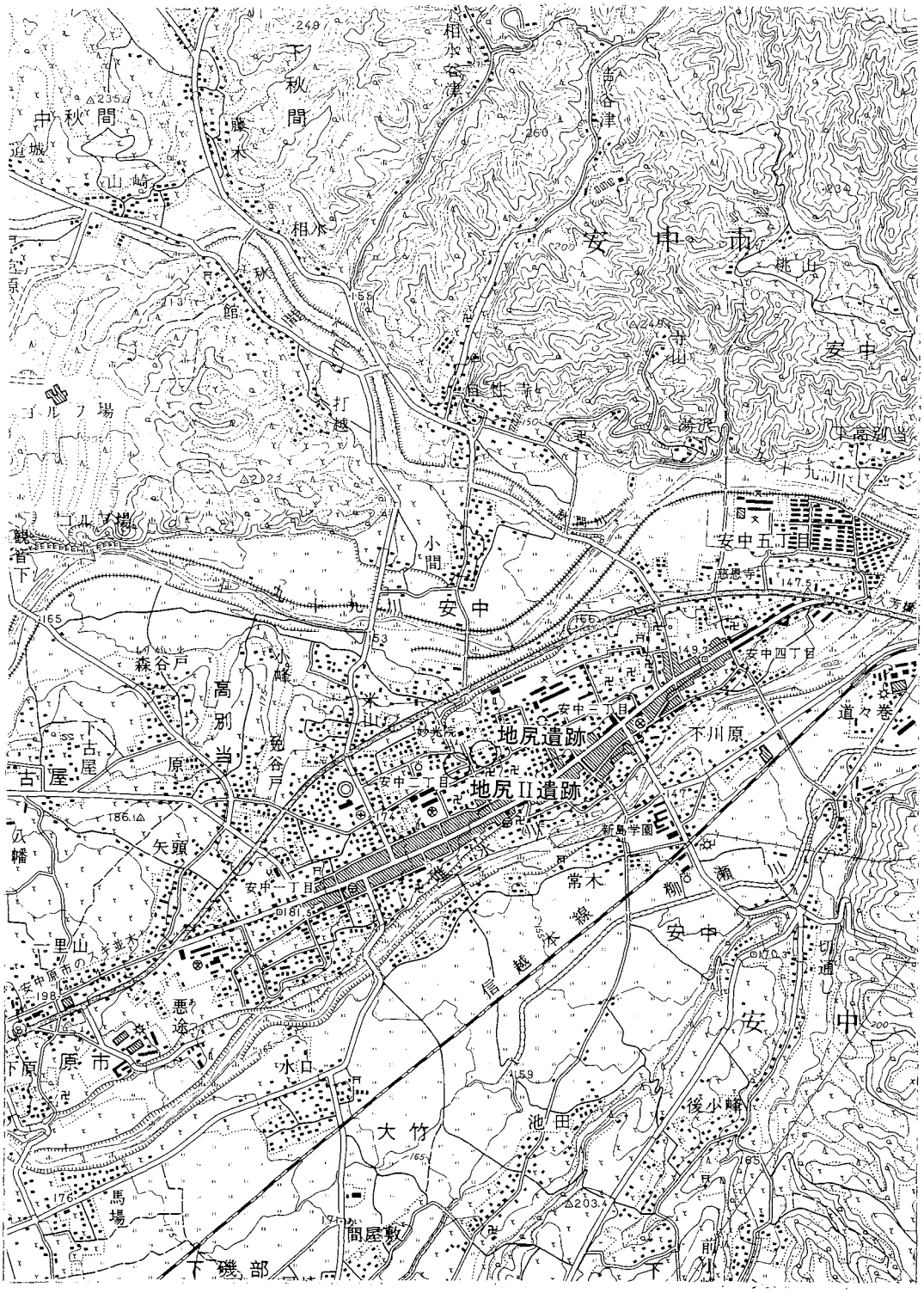
また、地尻II遺跡は道路をはさんで調査区が２分されるため、西側をＡ区、東側をＢ区とした。

地尻遺跡の発掘調査は昭和62年11月９日から昭和63年１月20日まで実施した。地尻II遺跡は平成２年１月９日から平成２年３月10日まで実施した。

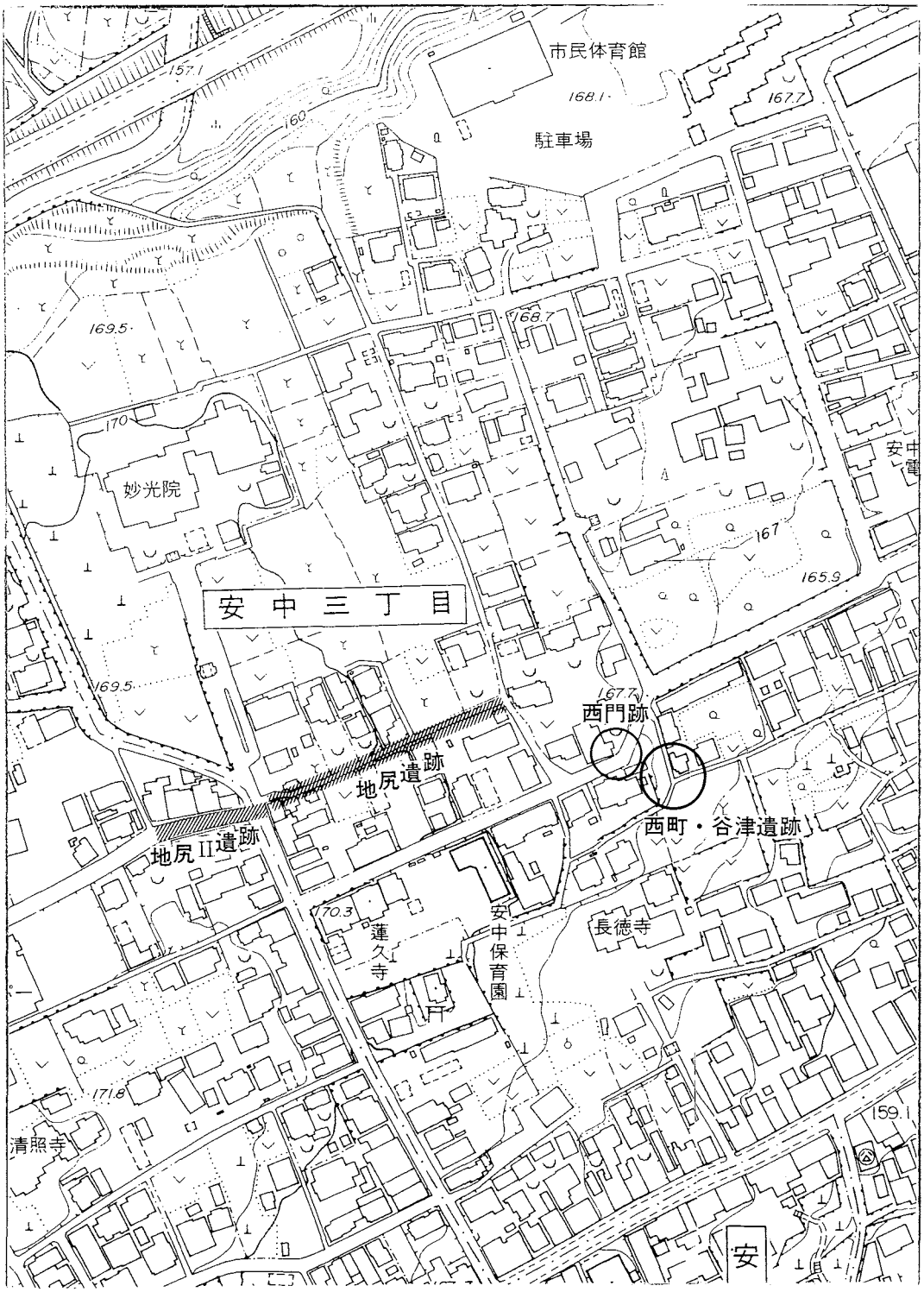
両遺跡とも調査はまず、バックホーにより表土を掘削し、その後人力により進め、遺構、遺物の確認作業を実施した。確認された遺構は精査を行い、測量、写真撮影を行った。測量については遺構平面図、土層断面図、コンタ図、また必要に応じて微細図の作成を行った。

遺物整理は地尻遺跡が昭和63年１月21日から３月31日までの間と平成２年４月１日から平成３年１月20日の間、地尻II遺跡が平成２年１月10日から３月31日までの間と平成２年４月１日から平成３年１月20日の間断続的に行った。

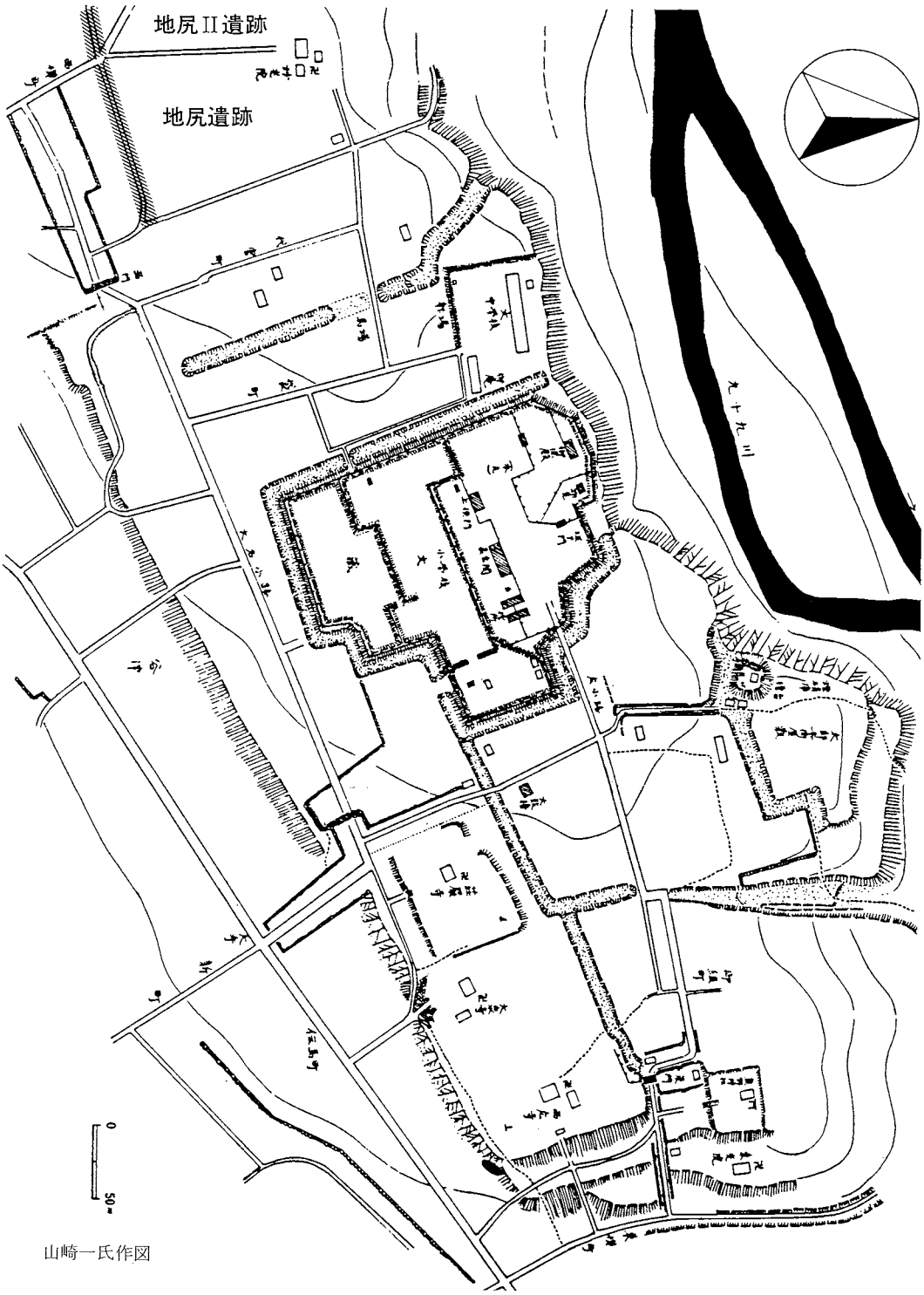
両遺跡とも方法は、遺物の水洗・注記→実測・拓本→トレースの順で行い、平行して遺構図面の整理・素図作成、トレース、写真整理を行った。



第１図　地尻遺跡・地尻II遺跡位置図

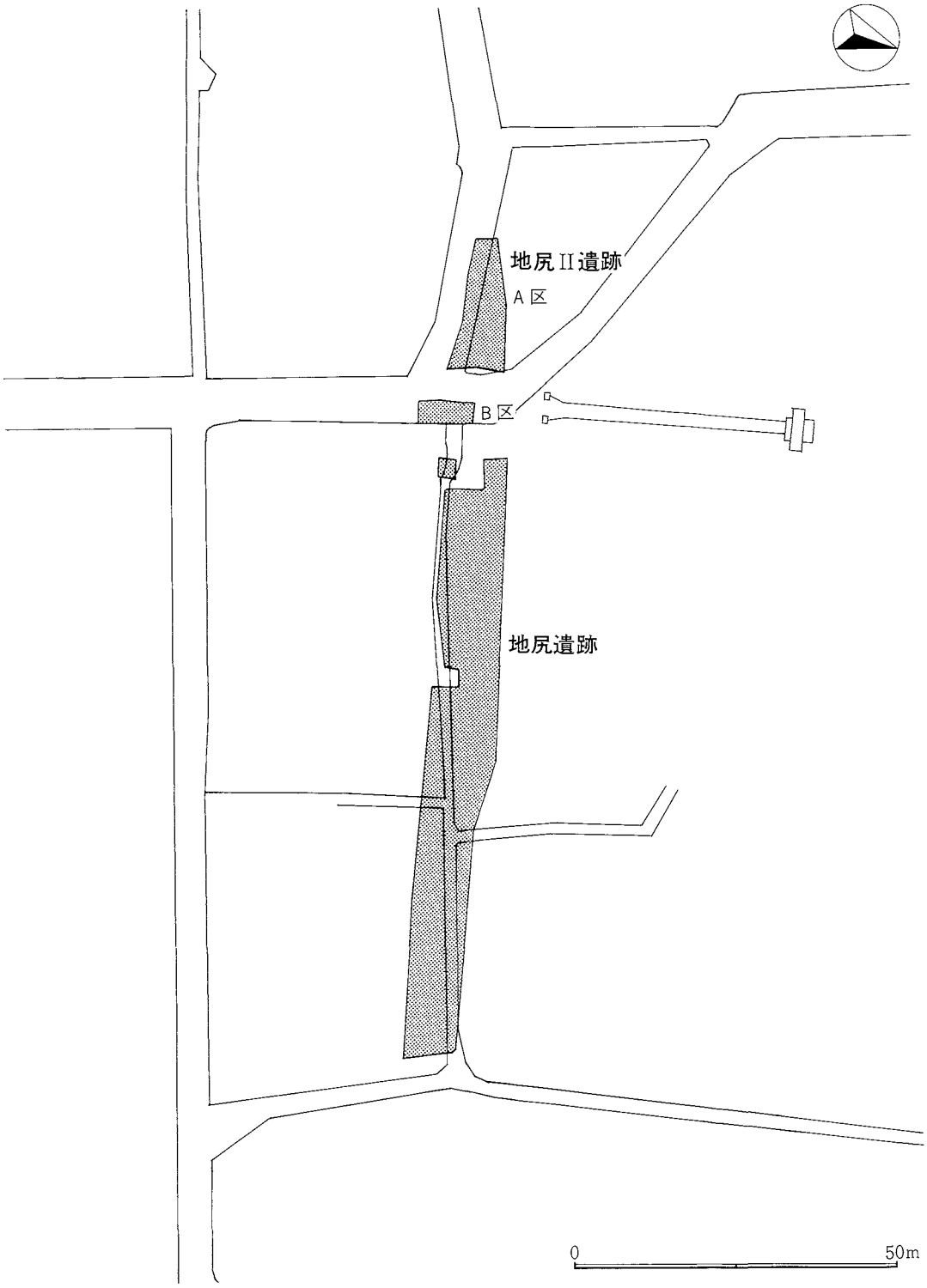

市民体育館
駐車場
157.1
160
168.1
167.7
169.5
168.7
170
妙光院
安中三丁目
167
165.9
169.5
167.7
西門跡
地尻遺跡
地尻II遺跡
西町・谷津遺跡
170.3
蓮久寺
安中保育園
長徳寺
171.8
清照寺
159.1
安

第２図　遺跡位置図



山崎一氏作図

第3図　遺跡位置図



第4図　調査区設定図

III　遺跡の地理的・歴史的環境

地尻遺跡、地尻II遺跡は共に安中市安中３丁目字地尻に所在する。安中地区は安中市のほぼ中央に位置し、碓氷川と九十九川に挟まれた碓氷川中位段丘上に位置する。両遺跡はこの段丘の東端近くの安中城の南西隅に位置し、北に妙光院、南に蓮久寺がある。

この安中城は、永禄２年安中忠政の築城と言われている。かつて安中城一帯は野尻といい、そこへ永禄２年４月安中越前守忠政が原市の榎下城よりやってきて在地の豪族窪庭図書に代地を与え退け、ここに城を構え、自らの名前をとって野尻を安中と改名した。忠政はその子忠成を安中城主として、自らは松井田城にあって、親子ともども武田氏の勢力に抗したがついに忠政は戦死、忠成は武田氏に降って臣となった。そして天正３年長篠の戦いに於て一族全滅したという。安中氏滅亡後一たんは廃城となったが、江戸時代に井伊直勝によって再興されたが、井伊氏２代、水野氏２代、堀田氏１代、板倉氏２代、内藤氏３代と相つぎ、寛延２年から再び板倉氏の城となり、６代を経て明治６年には廃された。城は安中氏時代の城の一部で陣屋構えのものであった。

城跡の規模は東北一西南、650m、幅350m、西北面は九十九川の断崖で高さ20mにも及び、東北面、東南面も10m以上の急斜面で城外にのぞむ。西南面だけは平地続きで、そこを掘りきっている。堀切は西南部が失われてしまったが、長さ300m、北よりに虎口跡があり、北側に「折」が構えられている。この虎口を入ったところが３の丸で、東南面から東北面まで回っているが、東北部は堀によって別郭となる。東北面には腰曲輪様の部分もあり中央に筋違いの虎口があった。

内郭は３郭に分かれ、東北から西南に並ぶ、東北の端の郭は太郎兵衛屋敷と呼び、東西150m、南北100m、西面は急崖、北面には腰曲輪がつく。南面の堀には東よりに「折」があり、東面の谷地は自然の壕で、２の丸堀に続く。中央の郭は東西220m、南北180m、東面と西南部、西面に虎口があり、北面にも太郎兵衛屋敷への通路がある。西の郭は、後の安中城本郭となっていたところで東西、南北とも200mあり、東北面は屏風折、東南面は雁木折になっていた。

江戸時代にはこの内部が中仕切りによって南北に３分され、北が御殿、南が倉屋敷、中部は東南、西の両虎口を受け、御殿及び倉屋敷へはここから入ったらしい。御殿北面には坂下門があった。

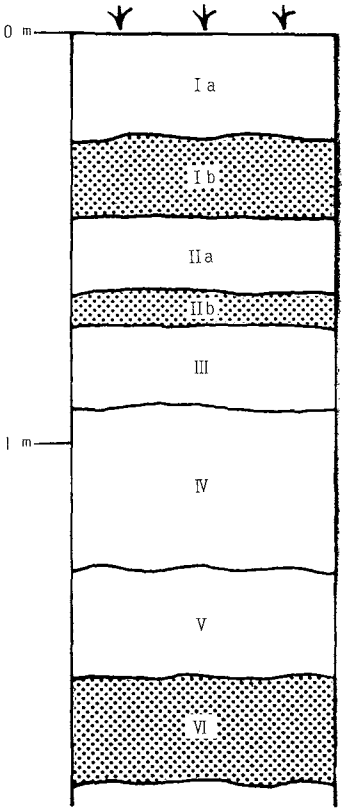
大手門、西門、東門はそれぞれ安中氏時代の３の丸外側につき、その内部は武家屋敷になっていた。各門には前に、陣屋構え特有の長い枡形がついていた。以上の事が今までの研究により明らかにされている。

周辺には平成元年度に調査を実施した西町・谷津遺跡がある。この遺跡も堀と、それを埋めて作った水路が確認されている。（第２図）

IV　層　　序

地尻遺跡、地尻II遺跡の基本層序は第５図のとおりである。以下に各層の特徴について述べることにする。

Ⅰａ層	黒褐色土層	浅間Ａ軽石を多量に混入する表土。しまり、粘性はない。
Ⅰｂ層	灰白色軽石層	浅間Ａ軽石（A_s－Ａ：1783年）の純層。部分的に寄せられている。
IIａ層	黒色土層	浅間Ｂ軽石を多量混入する。しまり、粘性はない。
IIｂ層	灰褐色軽石層	浅間Ｂ軽石（A_s－Ｂ：1108年）の純層。部分的に確認される。
III層	黒色土層	粘性、しまり共にあまりない。
IV層	暗褐色土層	III層より明るく、しまり、粘性共にある。この層の上面で遺構確認ができる。
Ｖ層	黄褐色粘質土層	この層からローム層となる。粘性、しまり共にある。A_s－ＹＰの粒子を混入する。
VI層	黄色軽石層	板鼻黄色軽石（A_s－ＹＰ：約1.3万年前）の純層。しまり、粘性共にない。



第５図　基本層序柱状図

V　遺　跡　各　説

1　地尻遺跡

(1)　遺跡の概要

地尻遺跡からは、縄文時代の土壙２基、平安時代の住居址２軒、掘立柱１基、中世の堀、同時代と思われる土壙及びピット、江戸時代の水路、及び墓址、時期不明の溝１条が検出された。縄文時代の遺構は、土壙が２基検出されただけだが、中世の堀の覆土中から縄文時代の土器が検出されるため、堀を構築する際に縄文時代の遺構が壊されている可能性が高い。また、平安時代の遺構についても同じ様に、堀により壊されている可能性が非常に高い。堀については、かなり規模の大きな堀で、中世以降江戸時代には一度半分ほど埋められ、石組によって水路状の遺構を造っている。またその後江戸時代後半には完全に埋められて、畑になっていることが土層観察により確認される。

限られた時間内での調査であったため、江戸時代の水路と中世の堀を全て２面調査が行えず、江戸時代の水路跡がはっきりと確認できる部分に付いては江戸時代、その他については中世までの調査を実施した。

(2)　縄文時代の遺構と遺物

a　土　壙（第８図）

Ｄ－１号土壙

Ｂ－23グリッドに位置し、時期不明の１号溝と重複する。底面にはピットが堀込まれている。

土壙の平面形は楕円形で、規模は約１ｍ40cm×１ｍ、深さは約70cmを計る。

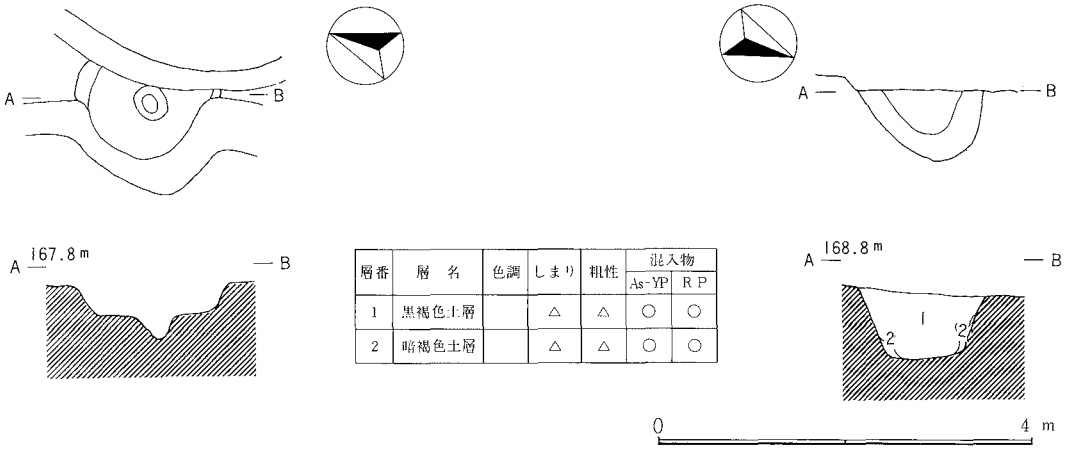
遺物は覆土中より縄文土器が数点出土している。しかし摩滅が著しく、時期ははっきりと確認できないが、縄文時代中期に属する土器と思われる。

Ｄ－２号土壙

Ｂ－19グリッドに位置し、約半分が調査区外に出る。

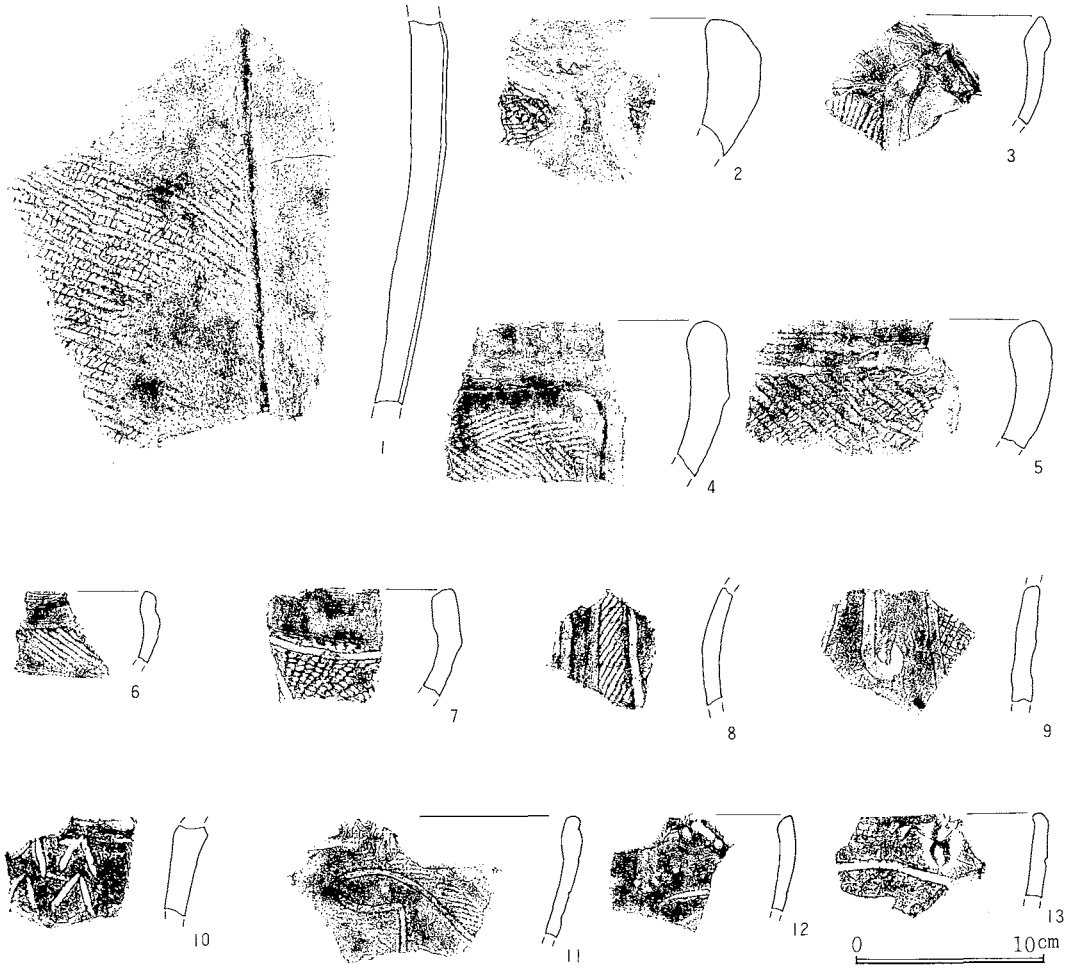
土壙の平面形は、ほぼ楕円形と推測される。深さは約70cmを計る。

遺物は覆土中より縄文土器が数点出土している。しかし、Ｄ－１号土壙同様摩滅が著しく、時期ははっきりと確認できないが、縄文時代中期に属する土器と思われる。



層番	層　名	色調	しまり	粗性	混入物	
					As-YP	RP
1	黒褐色土層		△	△	○	○
2	暗褐色土層		△	△	○	○

第８図　縄文時代土壙実測図



第９図　堀出土の縄文時代土器

b　堀の覆土中より出土の縄文遺物（第９図）

堀の覆土中より出土した縄文時代の遺物は、土器が十数点、石器はフレークが２～３点出土したのみであった。以下に摩滅などがなく時期のはっきりと確認できる土器について観てみたい。

１は胴部破片で、垂下する隆帯によって区画され、区画内に単節の斜縄文を施す。２は口縁部破片で、隆帯により口唇部下を楕円状に区画され、区画内に単節の斜縄文を施す。３は口縁部破片で、隆帯と沈線により口唇部下を区画し、区画内に単節の斜縄文を施す。４は口縁部破片で口唇部下を隅丸の長方形に区画され、区画内に単節の斜縄文を羽状に施す。５、６は口縁部破片で口唇部下に１条の沈線を横位に施文しその下に単節の斜縄文を施す。７は口縁部破片で、地文に単節の斜縄文を施した後、沈線を施文している。８、９は胴部破片で、垂下する沈線により区画され、区画内に単節の斜縄文を施す。10は胴部破片で、竹管による短い沈線によりハの字状の施文を施す。11は口縁部破片で、沈線により文様構成され、その区画内に単節の斜縄文を施す。12は口縁部破片で、沈線により文様構成される。13は口縁部破片で、沈線により文様構成され、口唇部直下に８の字状の貼付を施す。

(3)　平安時代の遺構と遺物

a　住居址

Ｈ－１号住居址（第10図）

Ｂ－16、17、Ｃ－16、17、Ｄ－16、17グリッドに位置し、住居北西隅を堀により切られている。

住居の平面形は長方形で、規模は約７ｍ70cm×３ｍ90cm、周壁は約30cmを計る。主軸方向はＥ－14°－Ｓを示す。

柱穴は確認できなかったが、周壁にピットが数基確認された。

カマドは住居址東の北寄りに設けられており、袖部はローム混入の褐色土で作り付けられている。

貯蔵穴はカマド北側に検出され、２段に掘り込まれている。

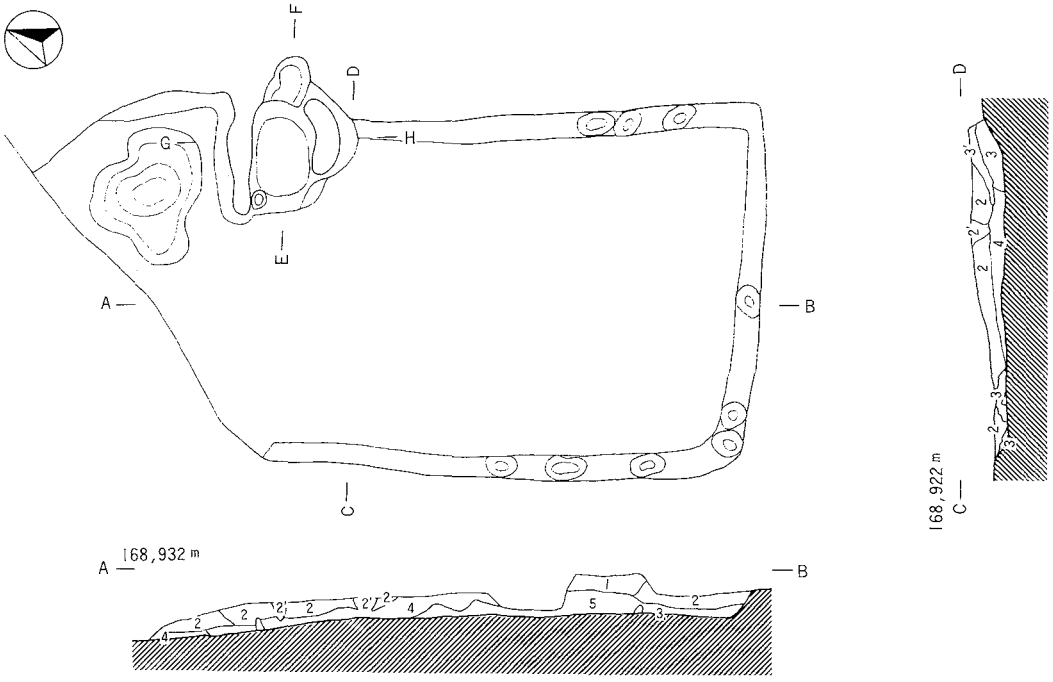
遺物出土状況

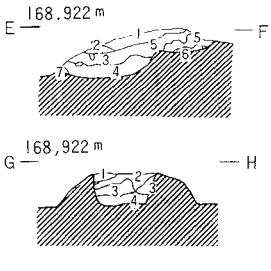
遺物は余り偏りを見せず住居址全体から出土している。

Ｈ－２号住居址（第13図）

Ｂ－18、Ｃ－18グリッドに位置し、住居北側が調査区外に出る。

住居の平面形はほぼ正方形と思われ、規模は約３ｍ80cm×３ｍ70cm、周壁は約20cmを計る。主軸方向はＥ－３°－Ｓを示す。



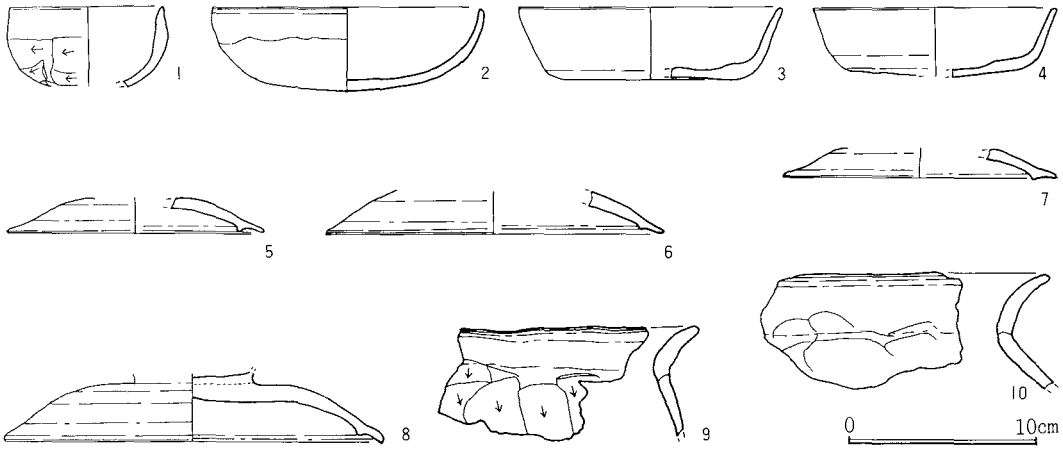


層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					焼土	灰	RP
1	暗赤褐色土層		○	○	△	△	※
2	暗褐色土層	1>2	○	○	※	△	※
2′	黒褐色土層	2>2′	○	○	×	○	
3	赤褐色土層	2′>3	○	○	◎	△	◎
4	暗赤褐色土層	3>4	○	○	○	○	△
5	黒色土層	4>5	○	△	△	△	
6	暗褐色土層	5>6	○	○	△	△	※
7	暗黄褐色土層	6>7	○	○	△		○

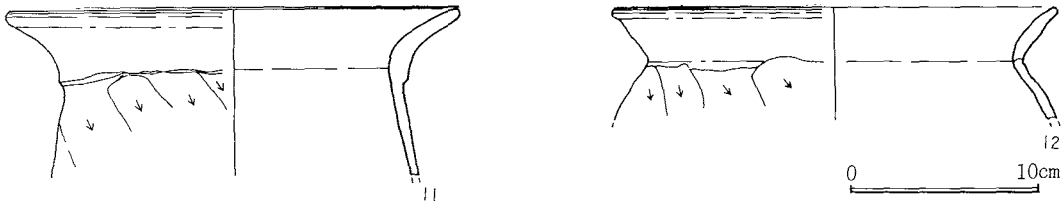
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物	
					As-B	RB
1	暗褐色土層		○	△	○	
2	暗褐色土層	1>2	◎	△	○	△
2′	暗褐色土層	2>2′	◎	△	△	△
3	暗褐色土層	2′>3	◎	△		○
3′	暗褐色土層	3>3′	◎	△		○
4	暗褐色土層	3′>4	◎	△		△
5	暗褐色土層	4>5	◎	△		○

0 4 m

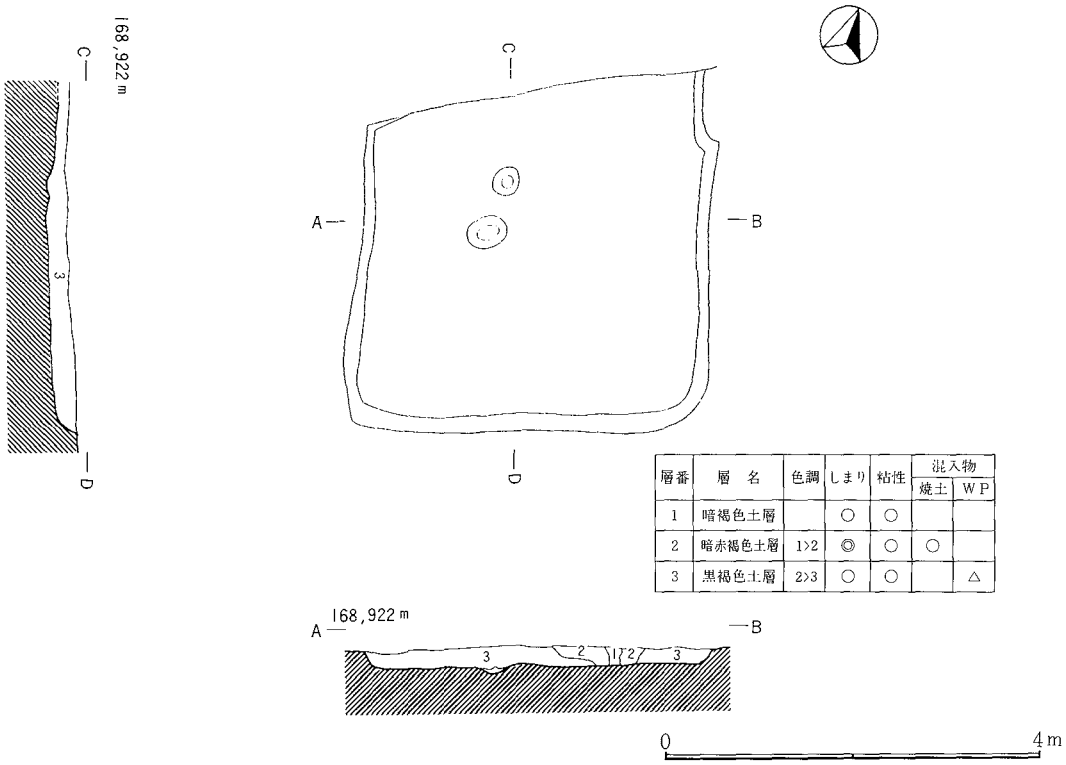
第10図　H－1号住居址実測図



第11図　H－1号住居址出土の遺物

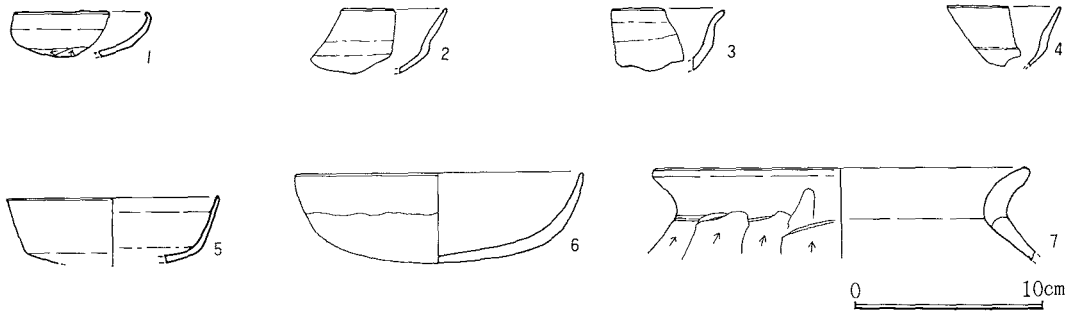


第12図　Ｈ－１号住居址出土の遺物



層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物	
					焼土	ＷＰ
1	暗褐色土層		○	○		
2	暗赤褐色土層	1>2	◎	○	○	
3	黒褐色土層	2>3	○	○		△

第13図　Ｈ－２号住居址実測図



第14図　Ｈ－２号住居址出土の遺物

柱穴は2基確認できたが、主柱穴に当たるかどうかは不明である。

カマド、貯蔵穴は共に確認できなかった。

遺物出土状況

遺物は偏りを見せず住居址全体から数点出土した。

b　H－1、2号住出土の遺物（第11図、第12図、第14図）

遺構名称	遺物番号	器　種	法量(cm)	調　整　技　法	胎土	色　調	残　存	備　考
H－1住	No.1	土師器坏	器高：4.2 口径：8.1	外面：口縁部横ナデ、体底部縦横方向へラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	1/7	
	No.2	土師器坏	器高：4.4 口径：14.2	外面：口縁部横ナデ、体底部縦横方向へラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	1/4	摩滅が著しい
	No.3	須恵器坏	器高：3.9 口径：13.8	内外面共に回転横ナデ、底部へラケズリ	緻密	灰色	1/3	
	No.4	須恵器坏	器高：3.6 口径：12.8	内外面共に回転横ナデ、底部へラケズリ	緻密	灰色	1/6	
	No.5	須恵器蓋	器高：1.9 口径：13.6	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰色	1/8	
	No.6	須恵器蓋	器高：2.3 口径：17.8	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰色	1/10	
	No.7	須恵器蓋	器高：1.6 口径：14.4	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰色	1/10	
	No.8	須恵器蓋	器高：3.6 口径：19.9	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰色	完形	
	No.9	土師器長胴甕	器高：6.1	外面：口縁部横ナデ、体部へラケズリ 内面：横ナデ	砂粒を少量含む	赤褐色	口縁から胴部1/10	
	No.10	土師器甕	器高：6.0	外面：口縁部横ナデ、体部へラケズリ 内面：横ナデ	砂粒を少量含む	赤褐色		
	No.11	土師器長胴甕	器高：8.8 口径：23.6	外面：口縁部横ナデ、体部へラケズリ 内面：横ナデ	砂粒を少量含む	赤褐色	口縁から胴部1/2	
	No.12	土師器甕	器高：6.0 口径：23.3	外面：口縁部横ナデ、体部へラケズリ 内面：横ナデ	砂粒を少量含む	赤褐色	口縁から胴部1/4	
H－2住	No.1	土師器坏	器高：2.5	外面：口縁部横ナデ、体底部縦横方向へラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	1/9	
	No.2	土師器坏	器高：3.5	外面：口縁部横ナデ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	1/9	摩滅が著しい
	No.3	土師器坏	器高：3.3	外面：口縁部横ナデ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	1/9	摩滅が著しい

遺構名称	遺物番号	器　種	法量(cm)	調　整　技　法	胎土	色　調	残　存	備　　考
	No.4	土師器坏	器高：3.2	外面：口縁部横ナデ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	1/9	摩滅が著しい
	No.5	須恵器坏	器高：3.6 口径：11.2	内外面共に回転横ナデ、底部ヘラケズリ	緻密	灰白色	1/8	
	No.6	土師器坏	器高：4.8 口径：15.1	外面：口縁部横ナデ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	1/3	摩滅が著しい
	No.7	土師器甕	器高：4.7 口径：19.4	外面：口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ 内面：横ナデ	砂粒を少量含む	赤褐色	口縁から胴部1/5	

c　**掘立柱建物址**

1号掘立柱建物址（第15図）

C―13グリッドに位置する。

1軒×1軒で、平面形は長方形である。規模は3m60cm×1m60cmである。

(4)　中世の遺構と遺物

a　**堀**（第7図、第16図）

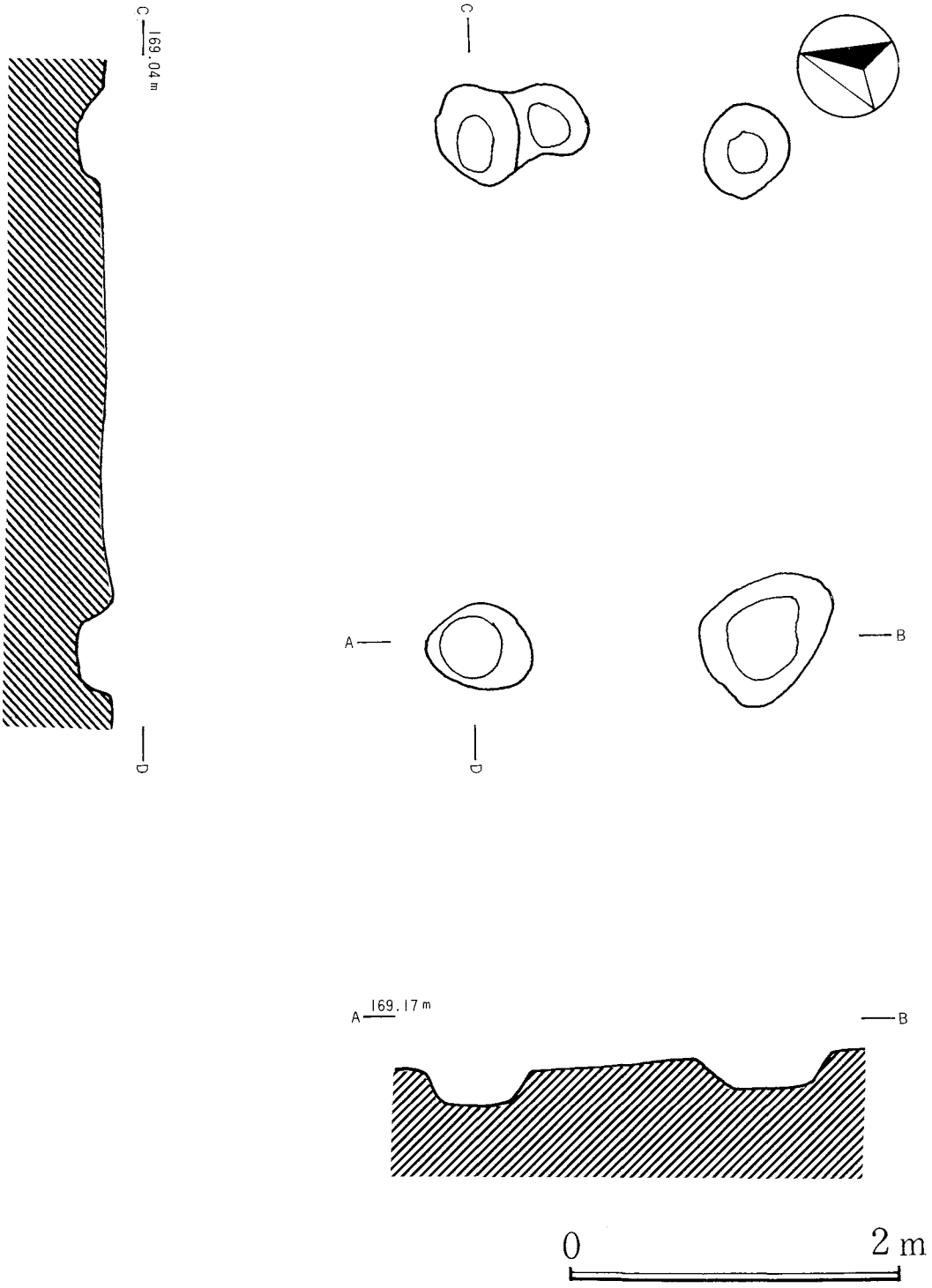
グリッド3のラインから25のラインまで調査区を斜めに長く横切る形で検出された。上端から下端まで途中2、3の段を持ち、規模は上端約5mから6m、下端約50cmから70cmで、深さ約2mを計る。覆土は、堀の底面近くでは、自然の水性堆積を示すが、その上面は江戸時代になってから人為的に埋め戻しが行われ水路を形成している、水路から上面も人為的に埋め戻しが行われており、畑の畝の跡が確認できる。

b　**堀に係わる施設**（第17図）

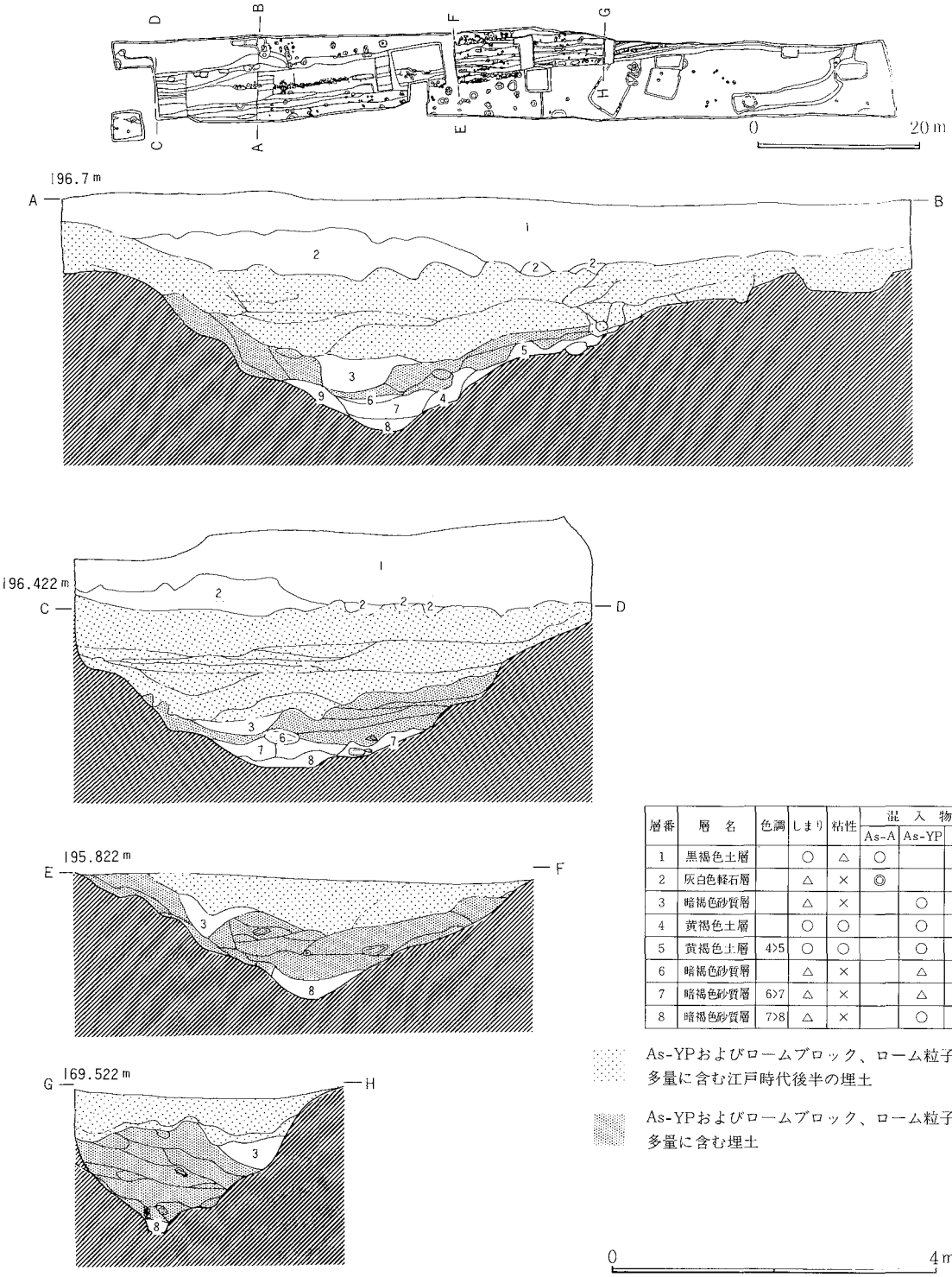
堀の斜面及び堀込みのエッヂ部分に柱穴が確認された。特にグリッド13のラインから15のラインにかけて多数検出された。これらの柱穴の集中は意図的なものと思われ、並び方などの柱穴相互の関係ははっきりと確認できなかったが、堀に架かる橋などの何等かの施設の柱穴跡と考えられる。

(5)　近世の遺構と遺物

a　**水路**（第7図、第18図）



第15図　掘立柱建物址実測図



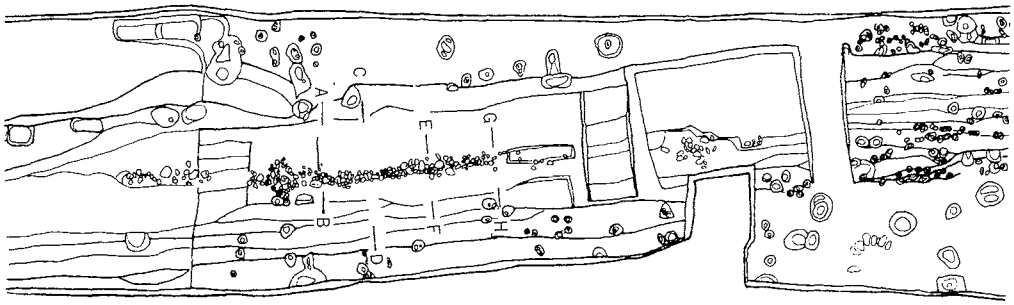
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					As-A	As-YP	RP
1	黒褐色土層		○	△	○		
2	灰白色軽石層		△	×	◎		
3	暗褐色砂質層		△	×		○	△
4	黄褐色土層		○	○		○	
5	黄褐色土層	4>5	○	○		○	○
6	暗褐色砂質層		△	×		△	
7	暗褐色砂質層	6>7	△	×		△	
8	暗褐色砂質層	7>8	△	×		○	

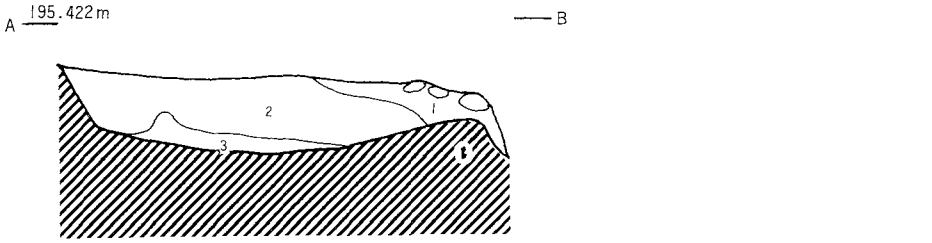
As-YPおよびロームブロック、ローム粒子を多量に含む江戸時代後半の埋土

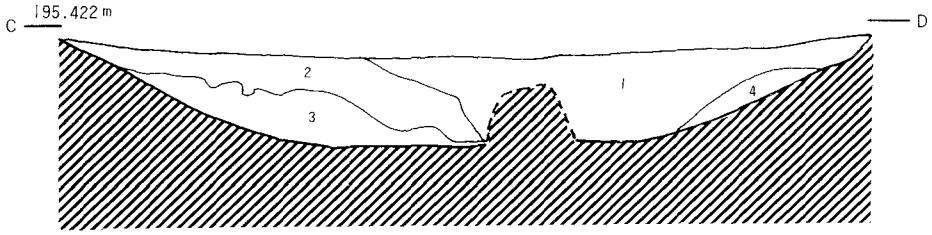
As-YPおよびロームブロック、ローム粒子を多量に含む埋土

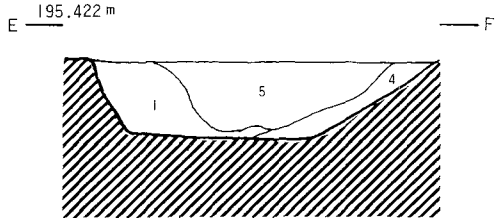
第16図　堀土層断面図

第17図　堀柱穴集中部実測図

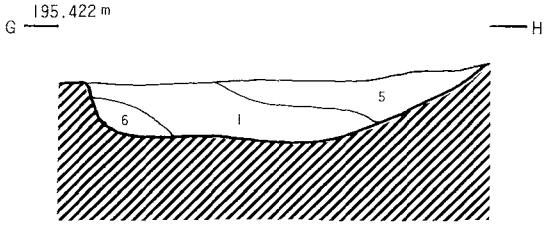








層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物	
					RB	As-YP
1	暗褐色砂質土層		○	×		△
2	暗黄褐色土層		○	○	△	○
3	暗褐色土層	1>3	○	○		△
4	暗褐色砂質土層	3>4	○	×		△
5	暗褐色砂質土層	4>5	○	×		○
6	暗褐色砂質土層	5>6	○	×		△



第18図　水路土層断面図

既存の堀を埋め戻して水路を構築しているため、堀と同一方向にある。規模は上端約１m、下端約70cm、深さ約40cmを計り、水路の北側は石垣が積まれている（南面には１箇所も石垣は確認できなかった)。石垣は部分的になくなっている箇所もあるが、北側は全面石垣積みになっていたと思われる。水路内の覆土は自然堆積の状態で確認され、全て砂質層であるため、水が流れていたことが推測される。

b　墓　址（第19図、第20図）

堀を埋め戻した面及び既存の堀のエッヂ部分に江戸時代のものと思われる墓が確認された。

１号墓

Ｂ－５、６グリッドに位置する。東と南面の掘り込みが確認できなかったが平面形は隅丸の方形と思われる。

規模は１m×75cm深さ10cmを計る。骨の遺存状態は良く、陶器の碗と古銭２点が検出されたが、古銭は錆がひどく種類等は不明である。

２号墓

Ｂ－５グリッドに位置する。掘り込みが確認できず骨のみの確認となった。骨の遺存状態は悪く頭蓋骨の一部と下肢骨の一部が確認できた。遺物は検出されなかった。

３号墓

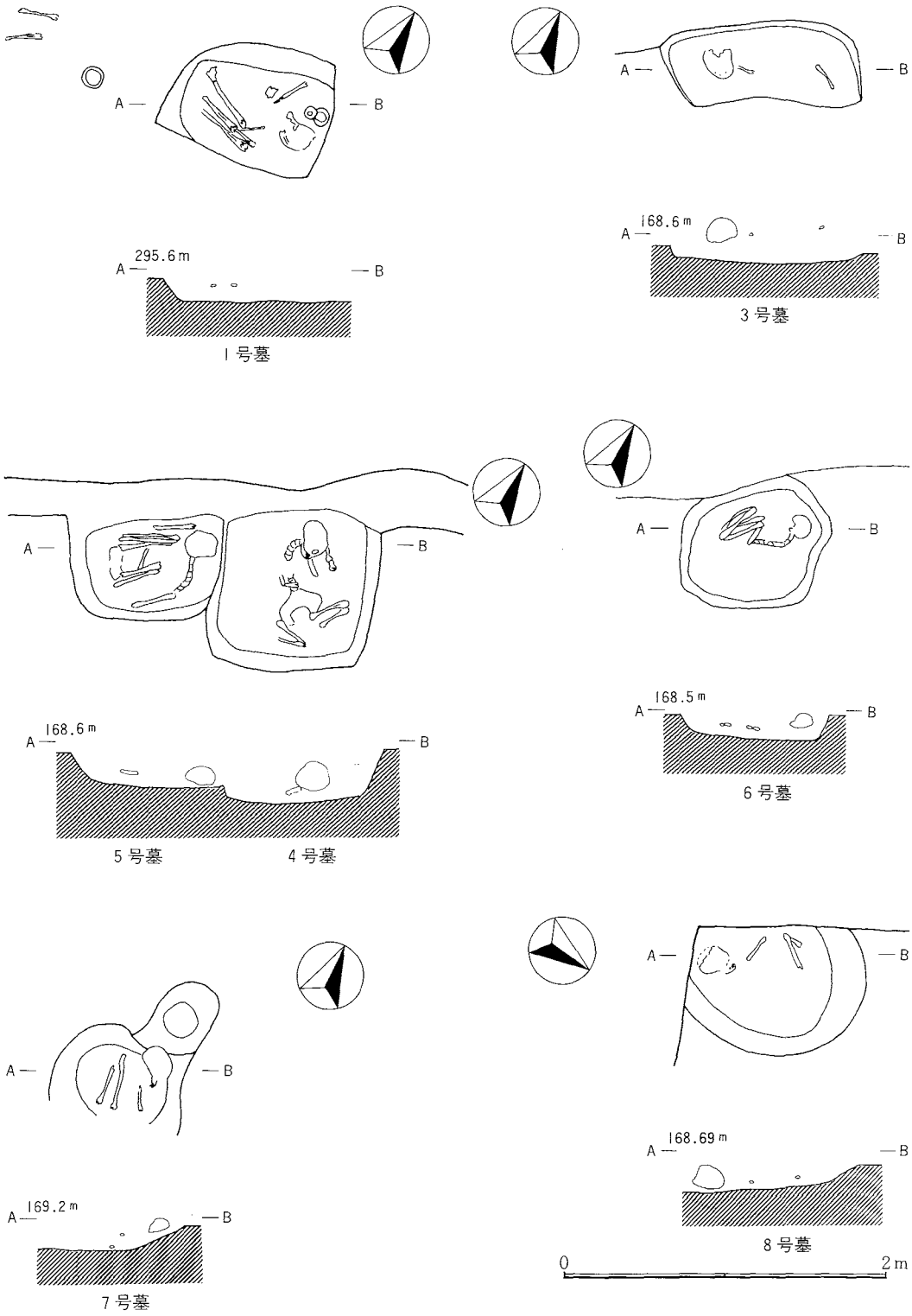
Ｂ－４、５グリッドに位置する。南側の掘り込みが確認できなかったが、隅丸の長方形と思われる。規模は１m20cm×55cm、深さ７cmを計る。骨の遺存状態は悪く頭蓋骨の一部と下肢骨の一部が確認できた。遺物は陶器の碗が２点検出された。

４号墓

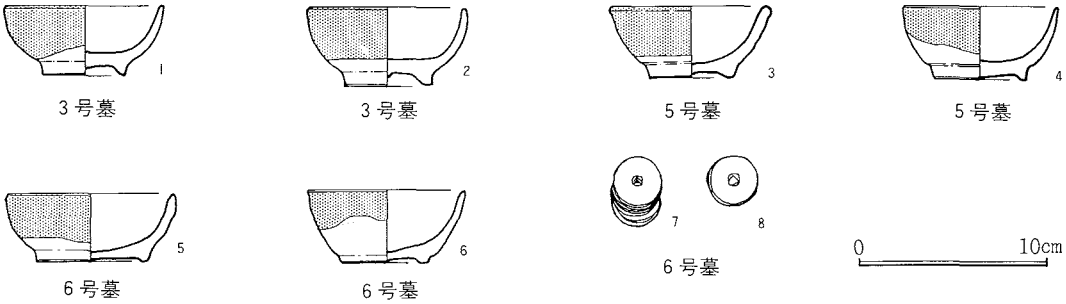
Ｃ－４グリッドに位置し、西側を一部５号墓と重複する。平面形は方形で、規模は１m×１m10cm、深さ28cmを計る。骨の遺存状態は非常によく、細部まで確認できた。遺物は古銭が数点検出されたが錆がひどく種類等は不明である。

５号墓

Ｃ－４グリッドに位置し、東側を一部４号墓と重複する。平面形は隅丸の方形で、規模は95cm×


A
B
295.6m
1号墓
168.6m
3号墓
168.6m
5号墓
4号墓
168.5m
6号墓
169.2m
7号墓
168.69m
8号墓
0
2m

第19図　墓址実測図



第20図　墓出土の遺物

90cm、深さ17cmを計る。骨の遺存状態は4号墓同様非常によく、細部まで確認できた。遺物も古銭が数点検出されたが錆がひどく種類等は不明である。また、陶器の碗が2点検出された。

6号墓

C－3グリッドに位置する。平面形は不正円形で、規模は1m×80cm、深さ14cmを計る。骨の遺存状態はあまり良くなく、頭蓋骨と下肢骨が確認できた。遺物は陶器の碗2点と、12枚重なった古銭と、3枚重なった古銭が検出された。いずれの古銭も錆がひどく時期等は不明である。

7号墓

B－2グリッドに位置する。南側の掘り込みが一部確認できなかったが、平面形はほぼ円形と思われ、規模は85cm×70cm、深さ15cmを計る。骨の遺存状態は悪く頭蓋骨の一部と下肢骨の一部が確認できた。遺物は検出されなかった。

8号墓

B－2グリッドに位置する。西と南が調査区外であるが、平面形は楕円形と思われ、深さ12cmを計る。骨の遺存状態は悪く頭蓋骨の一部と下肢骨の一部が確認できた。遺物は検出されなかった。

c　墓出土の遺物（第20図）

遺物番号	出土位置	器　種	法量(cm)	調　整　技　法	胎　土	釉　色	残　存
No.1	3号墓	陶　器 小　碗	器高：3.7 口径：8.2	体部外面下方を除き施釉される	淡灰色	淡褐色	完形
No.2	3号墓	陶　器 小　碗	器高：4.4 口径：8.2	体部外面下方を除き施釉される	淡灰色	淡褐色	完形
No.3	5号墓	陶　器 小　碗	器高：3.6 口径：8.2	体部外面下方を除き施釉される	淡灰色	茶褐色	完形

遺物番号	出土位置	器　種	法量(cm)	調　整　技　法	胎　土	釉　色	残　存
No.4	5号墓	陶　器 小　碗	器高：3.8 口径：8.2	体部外面下方を除き施釉される	淡灰色	淡褐色	完形
No.5	6号墓	陶　器 小　碗	器高：3.6 口径：8.8	体部外面下方を除き施釉される	淡灰色	茶褐色	完形
No.6	6号墓	陶　器 小　碗	器高：5.0 口径：8.2	体部外面下方を除き施釉される	淡灰色	茶褐色	完形

d　畝　跡

平面での確認はできなかったが堀の土層断面（第16図）によって畑の畝が確認された。土の堆積状態を観ると、水路の上を人為的に埋め戻して畑を作っていることがわかる。また畑の畝の上面を浅間A軽石（天明3年）が覆っているため、江戸時代の後半の時期まで畑作を行っていた事がわかる。

(6)　時期不明の遺構

a　溝

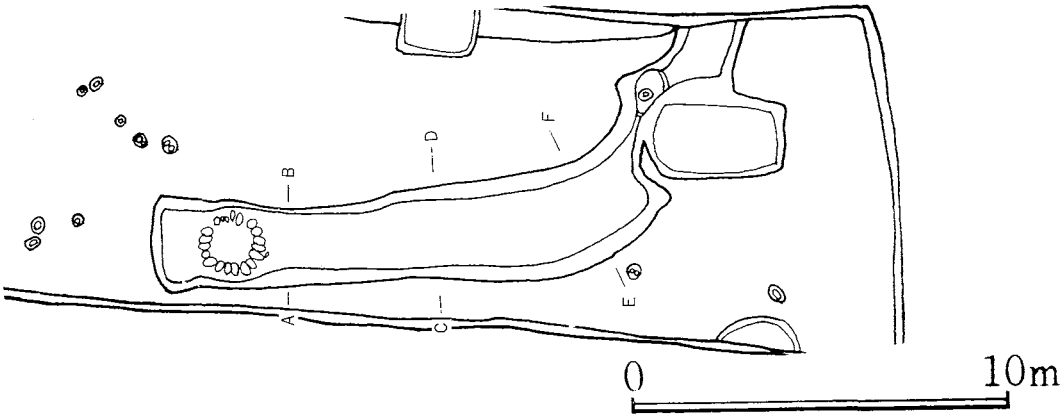
1号溝（第21図）

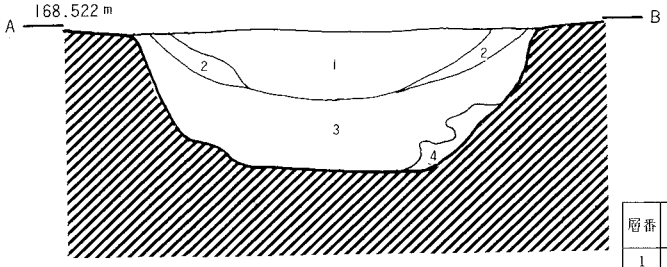
C―20グリッドからB―24グリッドに位置する。C―20グリッドより掘り込まれ、C―21グリット部分で江戸時代と思われる井戸と重複し、途中北側にカーブし縄文時代のD―1号土壙と重複し、調査区外に出てしまう。規模は上端約2mから2m50cm、下端約1m20cmから1m80cm、深さ約60cmから80cmを計り、底面は平らである。

覆土はレンズ状の自然堆積の状態を示している。遺物は平安時代の土器が数点出土しているが、覆土中からの出土のため、溝の時期の決定はできない。しかし縄文時代中期の土壙を切っており、覆土から平安時代の遺物が出土し、覆土にB軽石が混入していないことから、縄文時代中期から平安時代の後半以前に造られた溝であると言うことができそうである。

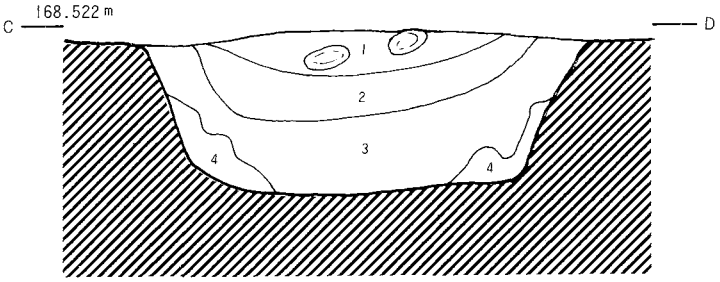
(7)　堀出土の遺物（第22図、第23図）

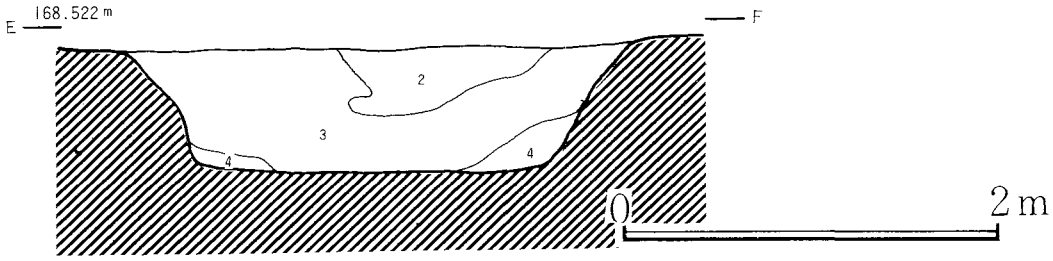
堀より出土した縄文時代以外の遺物を一括してあつかう。



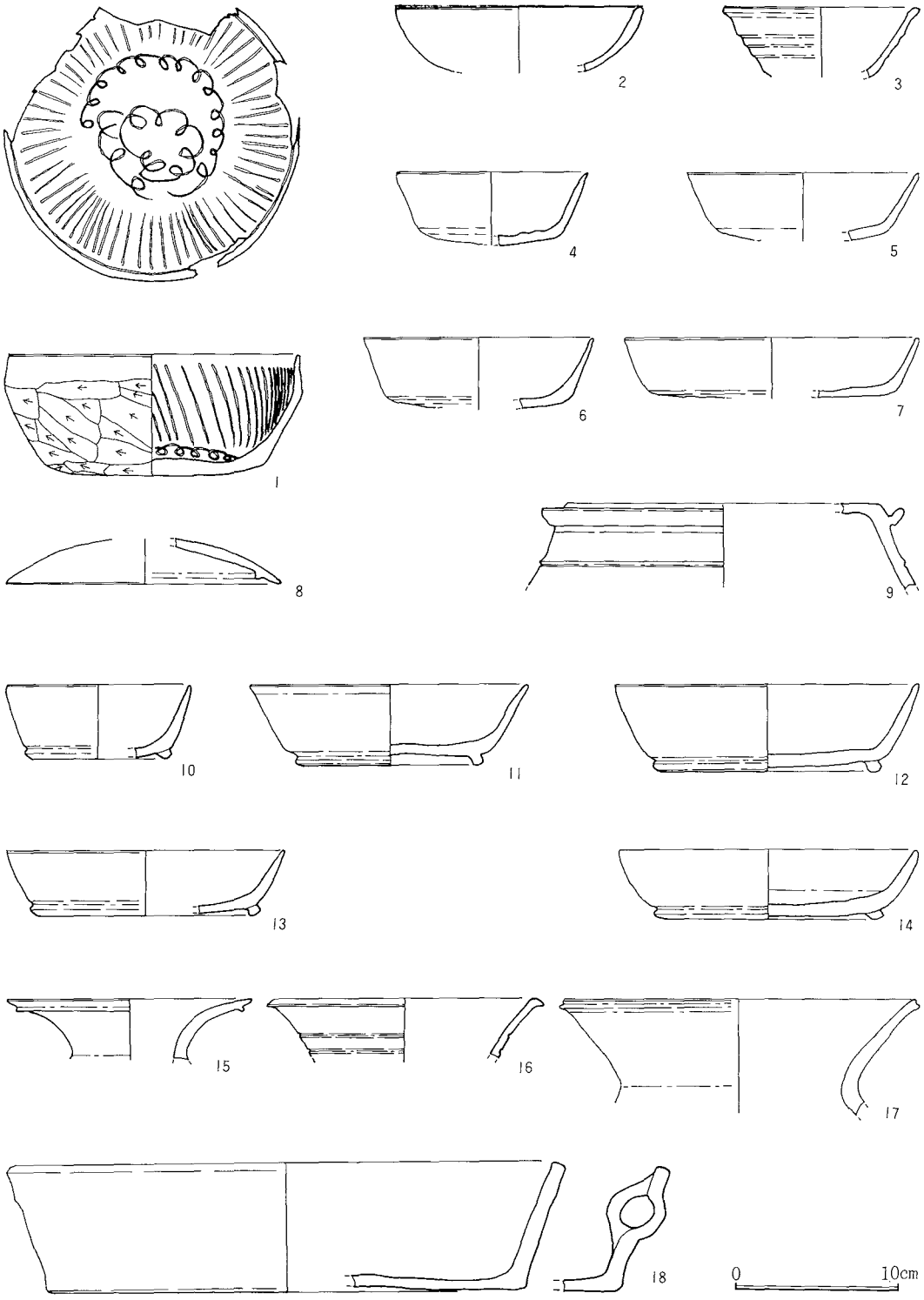


層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物	
					RP	
1	黒褐色土層		△	○	△	
2	黒褐色土層	1>2	△	○	○	
3	黒褐色土層	2>3	△	○	○	
4	暗褐色土層		△	○	○	



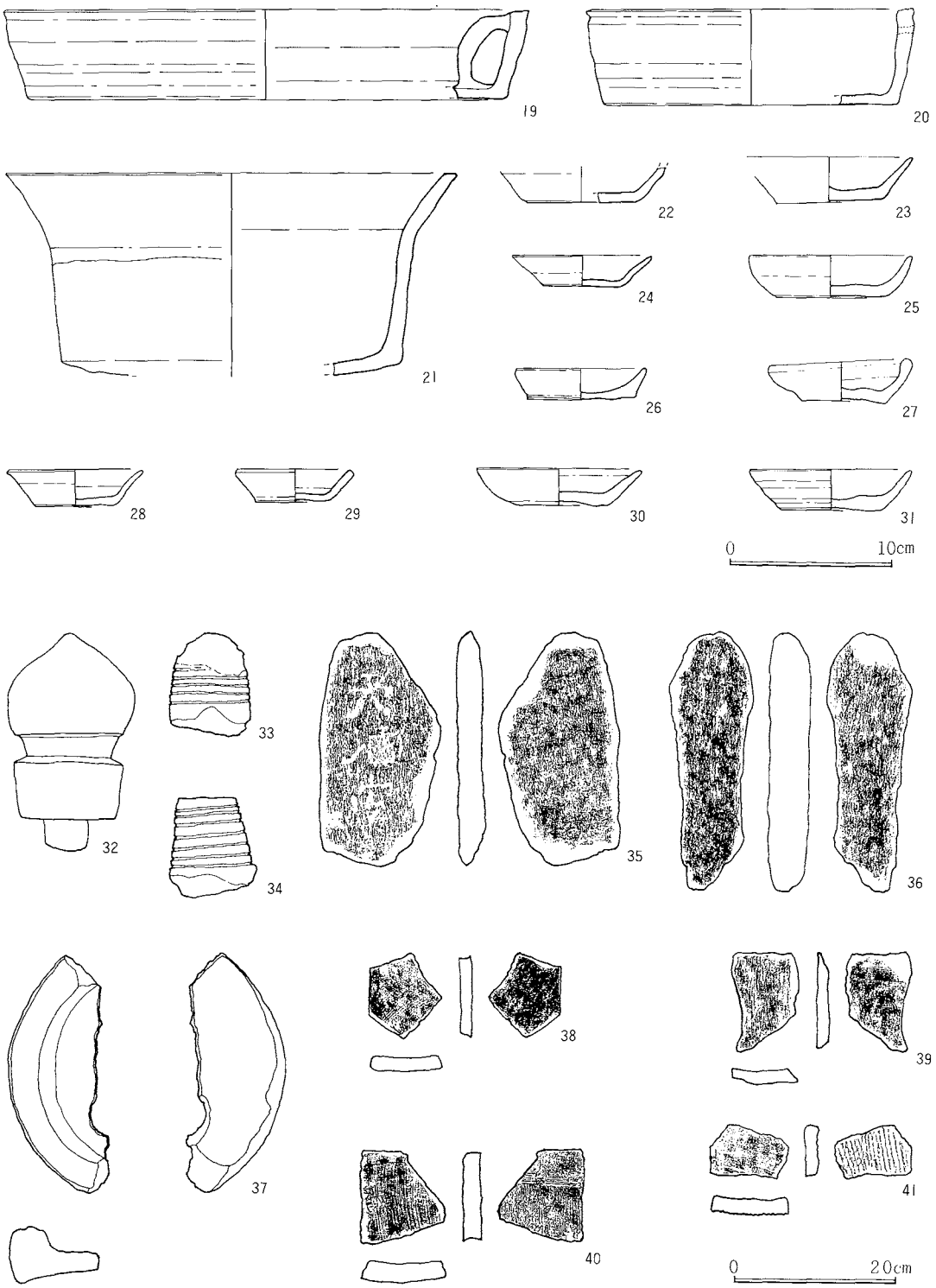


第21図　1号溝実測図



第22図　堀出土の遺物

遺物番号	器　種	法量(cm)	調　整　技　法	胎　土	色　調	残　存	備　　考
No.1	土師器 坏	器高：7.4 口径：17.6	外面：口縁部横ナデ、体底部 縦横方向へラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	完形	内面に暗文
No.2	土師器 坏	器高：4.0 口径：14.8	外面：口縁部横ナデ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	1/8	摩滅が著しい
No.3	須恵器 坏	器高：4.3 口径：11.6	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰色	1/10	
No.4	須恵器 坏	器高：4.4 口径：11.6	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰色	1/4	底部摩滅糸きり不明確
No.5	須恵器 坏	器高：4.1 口径：14.0	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰色	1/6	底部摩滅糸きり不明確
No.6	須恵器 坏	器高：4.3 口径：14.0	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰色	1/8	底部摩滅糸きり不明確
No.7	須恵器 坏	器高：3.7 口径：17.8	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰色	1/8	底部摩滅糸きり不明確
No.8	須恵器 蓋	器高：2.8 口径：16.8	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰色	1/9	
No.9	須恵器 円面硯	器高：5.1 口径：20.0	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰色	1/30	
No.10	須恵器 高台坏	器高：4.5 口径：11.2	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰色	1/4	底部摩滅糸きり不明確
No.11	須恵器 高台坏	器高：4.9 口径：16.8	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰色	1/4	底部摩滅糸きり不明確
No.12	須恵器 高台坏	器高：5.3 口径：18.4	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰色	7/10	底部摩滅糸きり不明確
No.13	須恵器 高台坏	器高：4.0 口径：16.9	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰色	1/8	底部摩滅糸きり不明確
No.14	須恵器 高台坏	器高：4.3 口径：18.0	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰色	1/4	底部摩滅糸きり不明確
No.15	須恵器 壺	器高：3.7 口径：14.9	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰色	口縁から頸部1/4	
No.16	須恵器 壺	器高：3.9 口径：16.0	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰色	口縁から頸部1/6	
No.17	須恵器 壺	器高：6.9 口径：21.3	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰色	口縁から頸部1/8	
No.18	軟質陶器 内耳盤	器高：7.9 口径：33.0	内面に内耳1ヶ所あり、体部外面半下に指圧痕あり	砂粒を含む	灰褐色	1/5	外面にスス付着
No.19	軟質陶器 内耳盤	器高：5.5 口径：31.8	内面に内耳1ヶ所あり、体部外面半下に指圧痕あり	砂粒を含む	灰褐色	1/15	外面にスス付着
No.20	軟質陶器 内耳盤	器高：5.8 口径：19.4	尖孔1ヶ所あり、体部外面半下に指圧痕あり	砂粒を含む	灰褐色	1/20	外面にスス付着
No.21	軟質陶器 内耳鍋	器高：12.4 口径：27.5	内外面共にナデ、内耳推定部分欠損	砂粒を含む	灰褐色	4/5	外面にスス付着
No.22	土師質 小皿	器高：2.2	内外面共に横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	1/5	


19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
0
10cm
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
0
20cm

第23図　掘出土の遺物

遺物番号	器　種	法量(cm)	調　整　技　法	胎　土	色　調	残　存	備　　考
No.23	土師質 小　皿	器高：2.2 口径：10.1	内外面共に横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	1/2	
No.24	土師質 小　皿	器高：1.9 口径：8.5	内外面共に横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	9/10	
No.25	土師質 小　皿	器高：2.6 口径：9.8	内外面共に横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	1/3	
No.26	土師質 小　皿	器高：1.9 口径：7.8	内外面共に横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	1/3	
No.27	土師質 小　皿	器高：2.5 口径：8.3	内外面共に横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	3/5	
No.28	土師質 小　皿	器高：2.3 口径：8.1	内外面共に横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	3/5	
No.29	土師質 小　皿	器高：2.1 口径：7.0	内外面共に横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	3/4	
No.30	土師質 小　皿	器高：2.3 口径：10.0	内外面共に横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	4/5	
No.31	土師質 小　皿	器高：2.5 口径：9.8	内外面共に横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	1/3	

遺物番号	器　種	法量(cm)	石　質	備　　考
No.32	五輪塔	高さ：26.2 幅　：15.8	粗粒安産岩	空風輪部分
No.33	宝篋印塔	高さ：12.2 幅　：10.0	粗粒安産岩	相輪破片
No.34	宝篋印塔	高さ：12.0 幅　：10.8	粗粒安産岩	相輪破片
No.35	板　碑	高さ：28.2 幅　：15.0	緑泥片岩	天酒□の文字あり
No.36	板　碑	高さ：31.2 幅　：10.2	緑泥片岩	
No.37	石　臼	径　：35.0 厚さ：7.1	粗粒安産岩	上臼の破片、摩滅が著しい

遺物番号	器 種	法　量(cm)	調　整　技　法	胎　土	色　調
No.38	瓦 女瓦	厚さ：1.8	1枚作り、凸面縦井のナデ	白色粒子	暗灰色
No.39	瓦 女瓦	厚さ：1.8	1枚作り、凸面縦井のナデ	白色粒子	暗灰色
No.40	瓦 女瓦	厚さ：2.2	1枚作り、凹面・凸面粘土版剝ぎ取り痕有	白色粒子	暗灰色
No.41	瓦 女瓦	厚さ：2.0	1枚作り、凸面縄叩き	白色粒子	暗灰色

2　地尻II遺跡

(1)　A区の遺構（第24図）

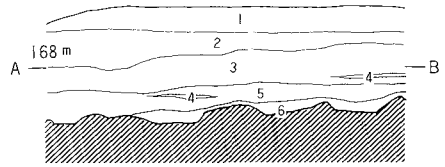
A区からは土壙状の掘り込みが多数検出された。しかし遺物も検出されず時期及びその性格については不明である。覆土を見ると、地山から表土付近までロームブロックやAs－YPを多く含んでいる層が交互に堆積し、人為的に埋め戻された様子がうかがえる。また、地尻遺跡のように畑の畝跡なども検出されなかった。

(2)　B区の遺構（第24図）

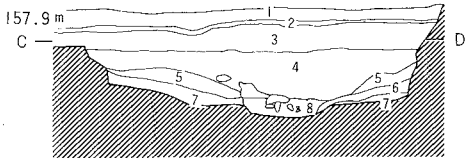
B区からは、地尻遺跡からの堀の続きが検出された。規模は上端約3m、下端約80cmで、深さ約1m60cmを計る。堀は調査区東端付近で南に曲がる。A区で堀が確認されなかったため、地尻遺跡から続く堀は妙光院の前で南に曲がり、現在の妙光院前を南下する道路の下を同じ方向に走行するものと思われる。

遺物は全く検出されなかったが、直径1mもある大きな石が堀の底面近くから、覆土中層にかけて多数検出された。覆土の堆積状態を見ると、やはりロームブロックやAs－YPを多く含んだ土層が交互に確認され、人為的に埋め戻された様子がうかがえるため、その埋め戻しの時点で一緒に投げ入れられたものであろう。

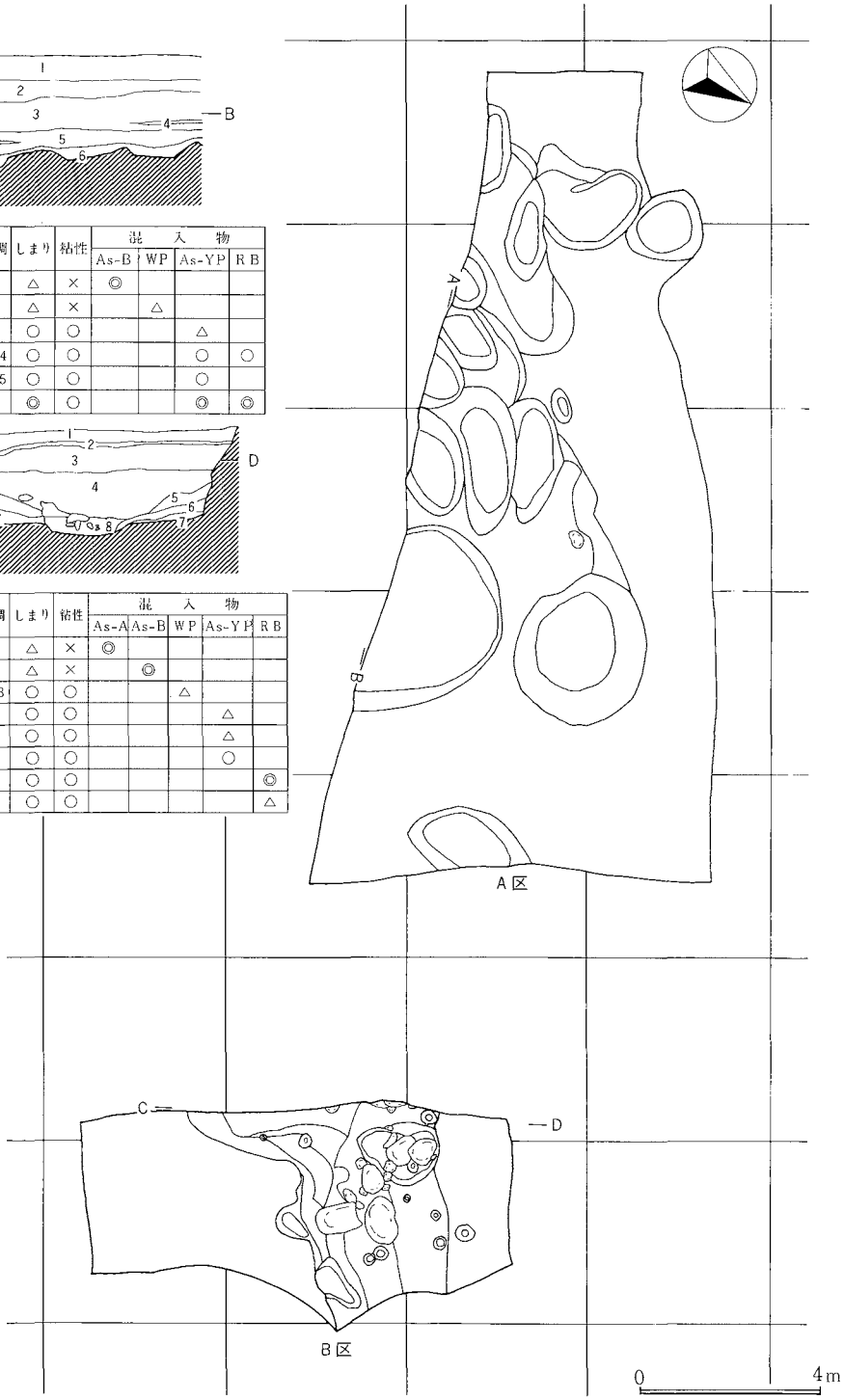
また、地尻遺跡で確認された水路状の遺構は、この部分では確認できなかった。



層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			
					As-B	WP	As-YP	RB
1	暗褐色土層		△	×	◎			
2	黒褐色土層		△	×		△		
3	暗褐色土層		○	○			△	
4	暗褐色土層	3>4	○	○			○	○
5	暗褐色土層	4≧5	○	○			○	
6	暗黄褐色土層		◎	○			◎	◎



層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物				
					As-A	As-B	WP	As-YP	RB
1	黒褐色土層		△	×	◎				
2	灰褐色土層		△	×		◎			
3	黒褐色土層	1<3	○	○			△		
4	暗褐色土層		○	○				△	
5	黒褐色土層		○	○				△	
6	暗褐色土層		○	○				○	
7	黄褐色土層		○	○					◎
8	暗褐色土層		○	○					△



第24図　地尻II遺跡全体図

VI　ま　と　め

地尻遺跡、地尻II遺跡の調査を通して中世の堀が確認できたがこの堀の存在については、これまでの安中城関係の研究により確認されていない新しい発見であった。堀の出土遺物から考えるとこの堀は戦国期の堀と思われ、永禄２年に安中忠政が安中城を築城する以前の在地の豪族窪庭氏時代の堀と考えられる。地尻II遺跡の堀の確認により、妙光院前から南下することがわかったが、地尻遺跡では堀は途中で調査区外に出てしまいその後どうなるのか確認はできていない。そこで現在のこの付近の地図と照らし合わせて何か手がかりが無いか観てみることにする。（第25図）

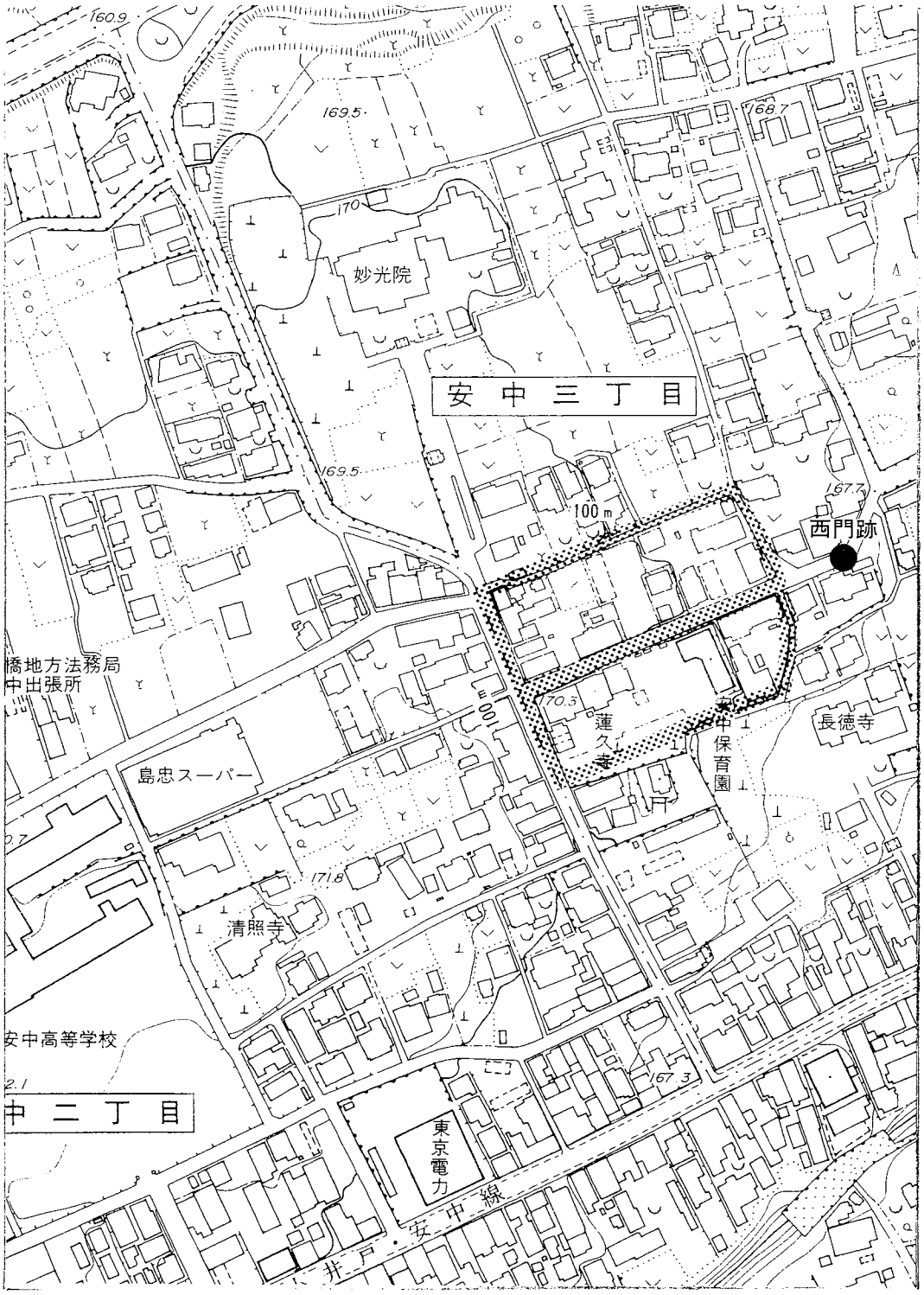
土地の地割と言うものは、時代が過ぎ去っても昔からの地割をある程度踏襲するものと言われる。古墳の周溝なりに畑が作られたり、城の堀跡に沿って道路が作られたり、畑が作られたり、城館址などは現在の地割等を基に、その当時の城域などを復元して行くこともできる。

そこで第25図を観ると、地尻遺跡の東端を南北に走る道がある。この道は途中安中城の西門に続く道を横切り蓮久寺の東、長徳寺の北で西に曲がり、妙光院から南下する道に出ずに途中で消えてしまう。地尻遺跡の堀がこの道に沿って南に曲がると考えると、地尻II遺跡の堀のカーブ部分から地尻遺跡東端の南北の道まで100数m、地尻遺跡から曲がり長徳寺の北で西に曲がるまで約100m、その曲がりから妙光院前の道まで約100m、そこから地尻II遺跡の堀のカーブ部分まで約100mで、約100m四方に区画された部分があることがわかる。また、もし西門へ続く道の部分で区画が切れるとしても、100m×50mの長方形の区画が確認できる。

実際に堀の確認はできないため確実なものではないが、100m四方か、100m×50mの長方形に堀が回り、その中に在地の豪族窪庭氏の館が存在した可能性は十分に考えられるのではないだろうか。

また、この堀は人為的に埋め戻され江戸時代には水路が形成されていた事もわかった。平成元年に調査した西町・谷津遺跡からも堀を埋め戻し石垣積みの水路が確認されている。どちらも時代的には同時と思われるが、この２つが平面的にどうつながって行くのかは、今後この付近での調査の課題となろう。そして江戸時代も後半になるとこの堀をすべて埋め戻し畑作を行っていることが覆土から確認されている。

この他、この堀により縄文時代の遺構、平安時代の遺構が壊されていることもわかった。安中市の中心地域に当り、かなり市街化されてしまっていて、分布調査などによっても遺跡の確認が困難な場所ではある。しかし地形的にみれば縄文時代や平安時代などの集落を形成するのに絶好の台地であり、縄文時代の昔から、人々がこの台地に生活していた事がわかる。


160.9
169.5
168
170
妙光院
安中三丁目
169.5
167.7
100m
西門跡
橋地方法務局
中出張所
170.5
蓮久寺
中保育園
長徳寺
島忠スーパー
171.8
清照寺
安中高等学校
167.3
中二丁目
東京電力
井戸・安中線

第25図　窪庭館推定図

写　真　図　版

調査区遠景（矢印部分が遺跡）

調査区遠景安中大橋より（矢印部分が遺跡）

図版－2

地尻遺跡全景（西から）

地尻遺跡全景（東から）

H－1号住居址

H－1号住カマド

H－1号住遺物出土状況

H－1号住覆土

H－1号住覆土

H－1号住覆土

H－1号住カマド覆土

H－1号住カマド覆土

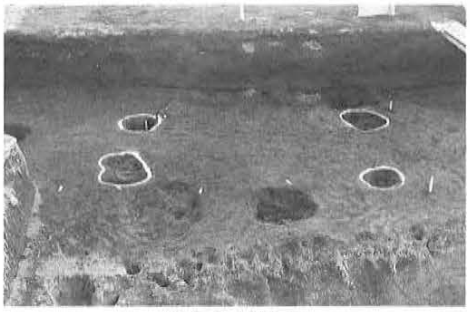
図版－4

H－1号住カマド覆土

H－2号住居址

H－2号住居址遺物出土状況

H－1、H－2号住居址



掘立柱建物址

堀柱穴検出状況

堀　覆　土

堀　覆　土

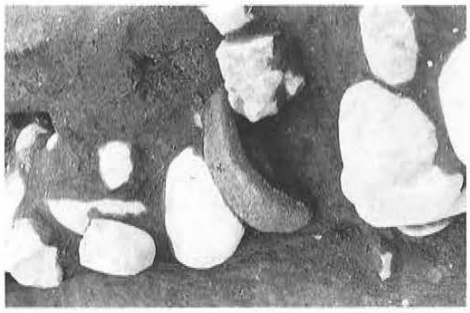
堀　覆　土

堀　覆　土

水　　路

水　　路

水　　路


水路遺物出土状況

水路覆土

水路覆土

図版－6

1　号　墓

2　号　墓

3　号　墓

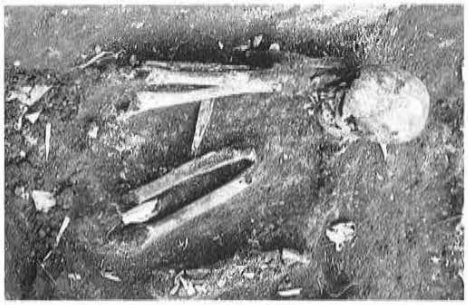
4号・5号墓

4号・5号墓

4　号　墓

4　号　墓

4　号　墓



5　号　墓

5　号　墓

6　号　墓

7　号　墓

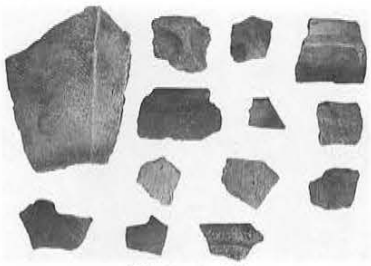
8　号　墓

時期不明の溝

溝　覆　土

溝　覆　土

図版－8


縄文土器

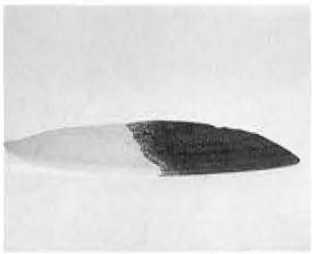
H－1住土師器　坏

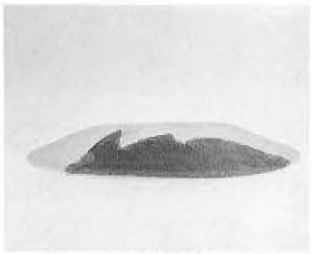
H－1住土師器　坏

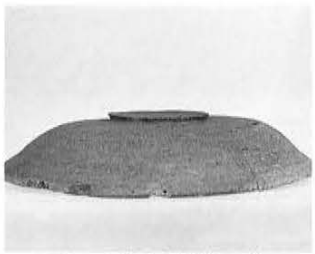
H－1住須恵器　坏

H－1住須恵器　坏

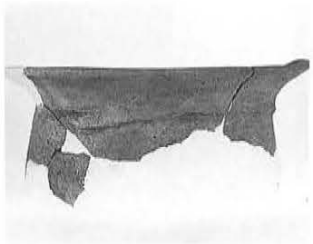
H－1住須恵器　蓋

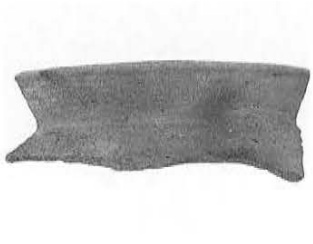

H－1住須恵器　蓋

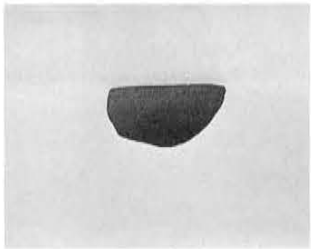

H－1住須恵器　蓋

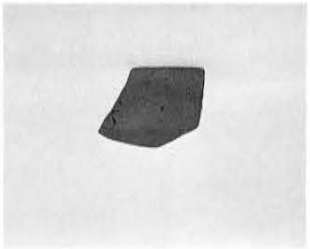

H－1住須恵器　蓋

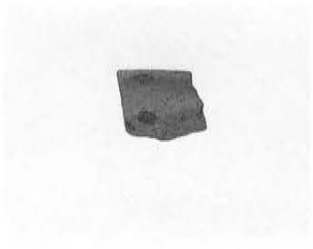
H－1住土師器　長胴甕

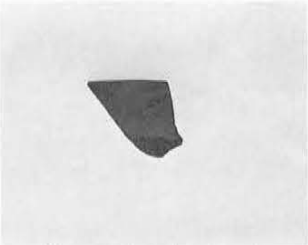

H－1住土師器　甕


H－1住土師器　甕

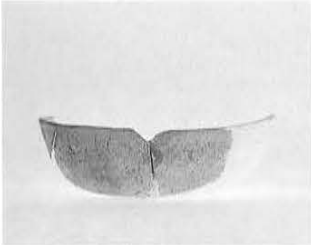

H－2住土師器　坏


H－2住土師器　坏

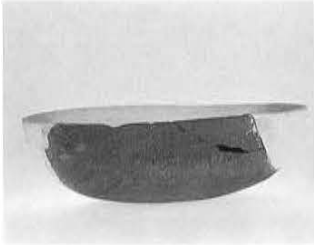

H－2住土師器　坏



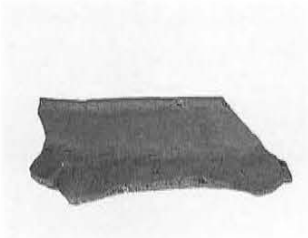
H－2住土師器　坏



H－2住須恵器　坏



H－2住土師器　坏



H－2住土師器　甕

3号墓陶器　小碗

3号墓陶器　小碗

5号墓陶器　小碗

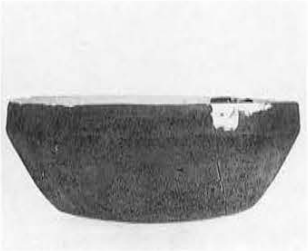
5号墓陶器　小碗

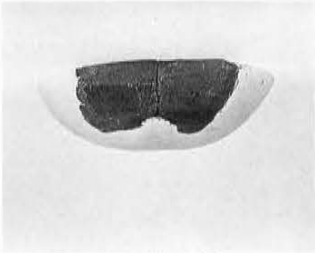
6号墓陶器　小碗

6号墓陶器　小碗

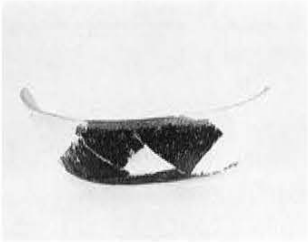
6号墓古銭

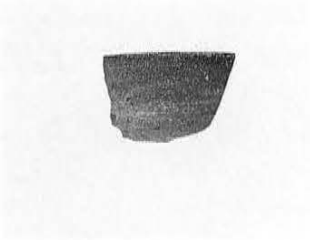
図版－10

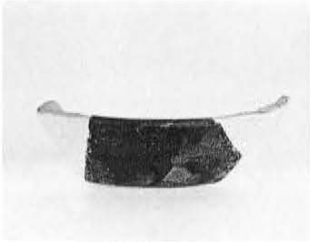

土師器　坏

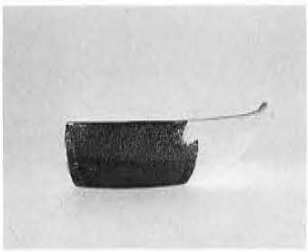

土師器　坏

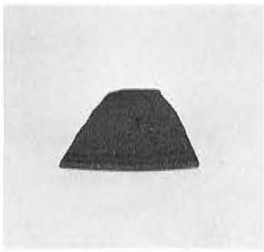
須恵器　坏

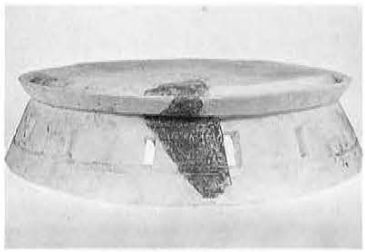

須恵器　坏

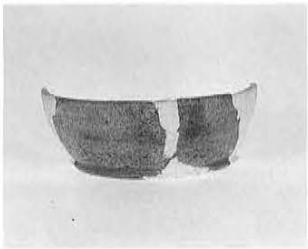

須恵器　坏

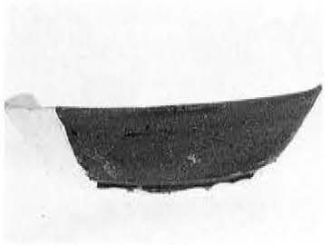

須恵器　坏

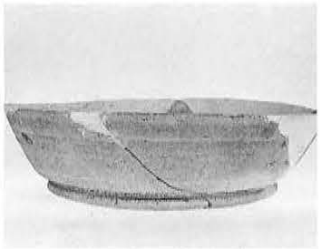

須恵器　坏

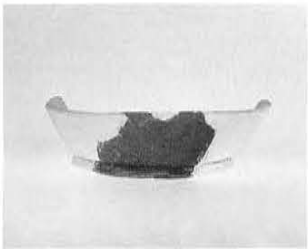

須恵器　蓋


須恵器　円面硯

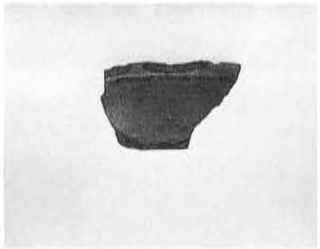

須恵器　高台坏

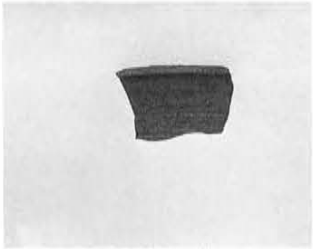

須恵器　高台坏

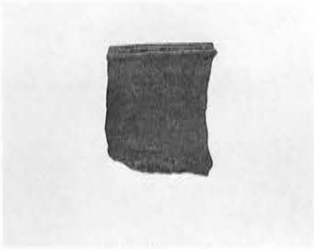

須恵器　高台坏

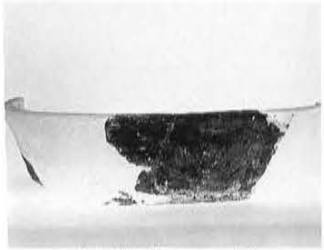

須恵器　高台坏

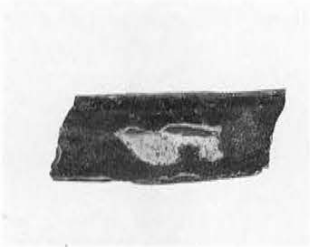
須恵器　高台坏


須恵器　壺


須恵器　壺

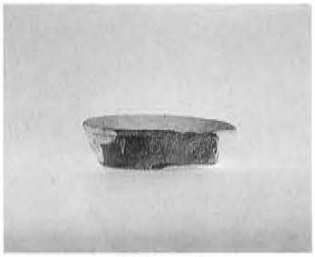

須恵器　壺

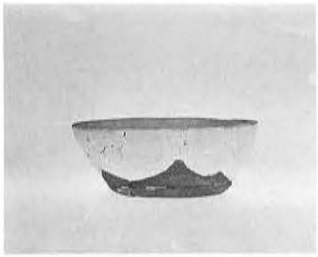

軟質陶器　内耳盤

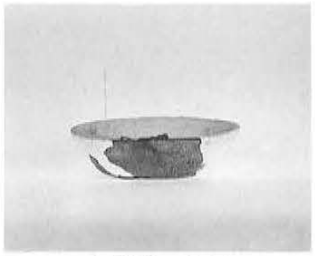

軟質陶器　内耳盤

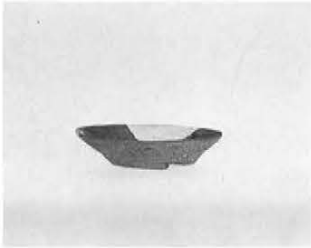
軟質陶器　内耳盤

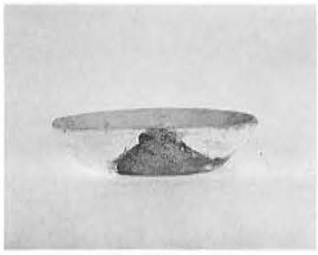
軟質陶器　内耳鍋


土師質　小皿


土師質　小皿


土師質　小皿


土師質　小皿


土師質　小皿

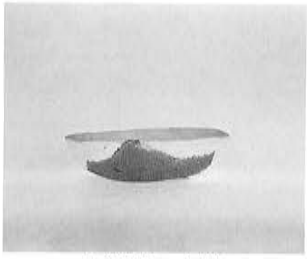
土師質　小皿

土師質　小皿

土師質　小皿

土師質　小皿

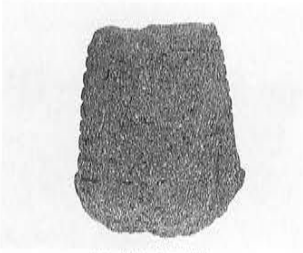
図版－12



土師質　小皿

五　輪　塔

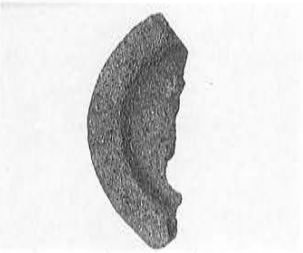
宝篋印塔



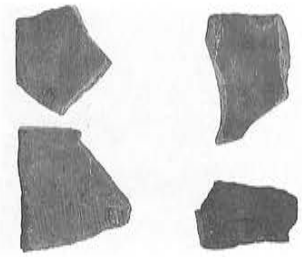
宝篋印塔

板　　碑

板　　碑



石　　臼



瓦

地尻遺跡・地尻II遺跡

—都市計画街路下の尻・茶屋町線取付道路
建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発　行　日　平成3年3月31日

編集・発行　安中市教育委員会
群馬県安中市安中1丁目23—13

印　　刷　朝日印刷工業株式会社